

秋田城跡歴史資料館年報 2021

秋 田 城 跡



秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2021

秋 田 城 跡

秋田市教育委員会

序 文

令和3年度の秋田城跡発掘調査は、焼山地区南西部において1箇所を実施し、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が検出されるなど、多くの成果をあげることができました。

調査の結果、外郭区画施設の南西隅にあたる部分を調査し、築地塀や材木塀が検出され、外郭区画施設の位置関係や延長方向を確認することができました。また城内区画施設の西隣接地において、焼土遺構や竪穴建物跡、鍛冶生産に関わる遺物を確認し、利用状況を把握することができました。焼山地区の実態解明のために重要な知見を得ることができたといえます。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上でも重要な情報であり、今回の成果を復元整備や公開活用に活かしていく予定です。

また、環境整備事業につきましては、城内東大路の整備や史跡公園連絡橋の施工を行うなど、順調に整備事業を推進しております。

このように、秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでいることは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員会、そして地元住民の皆様の多大なるご指導・ご協力の賜物と、厚く感謝申し上げます。

令和4年3月

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2021

目 次

例言・凡例

I 調査の計画と実施状況	1
II 第116次調査報告	
1 調査経過	2
2 検出遺構と出土遺物	9
①第IV層面検出の遺構と遺物	9
②第V層面検出の遺構と遺物	13
3 基本層序および各層出土遺物	25
III 考察	35
IV 秋田城跡環境整備事業	43
V 秋田城跡保存活用整備事業	46
VI 秋田城跡現状変更	48
写真図版	49
報告書抄録	64
秋田城跡歴史資料館要項	65

例　　言

- 1 本書は、令和3年度に実施した秋田城跡第116次発掘調査、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は伊藤武士、佐藤桃子が行った。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、伊藤・佐藤のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子が行った。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は、佐藤が行った。
- 5 墨書の解説については、三上喜孝氏（国立歴史民族博物館）の指導を得た。
- 6 本調査で得られた資料は、秋田市で保管している。
- 7 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。
渡邊定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、林部均、高橋栄一、三上喜孝、川畑純、小松正夫、大橋泰夫、高橋学、五十嵐一治、加藤朋夏、伊豆俊祐
文化庁文化財第二課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター（敬称略・順不同）

凡　　例

遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。

- 2 土器の性格、表面付着物の相違については、下記のスクリーントーンで表現した。

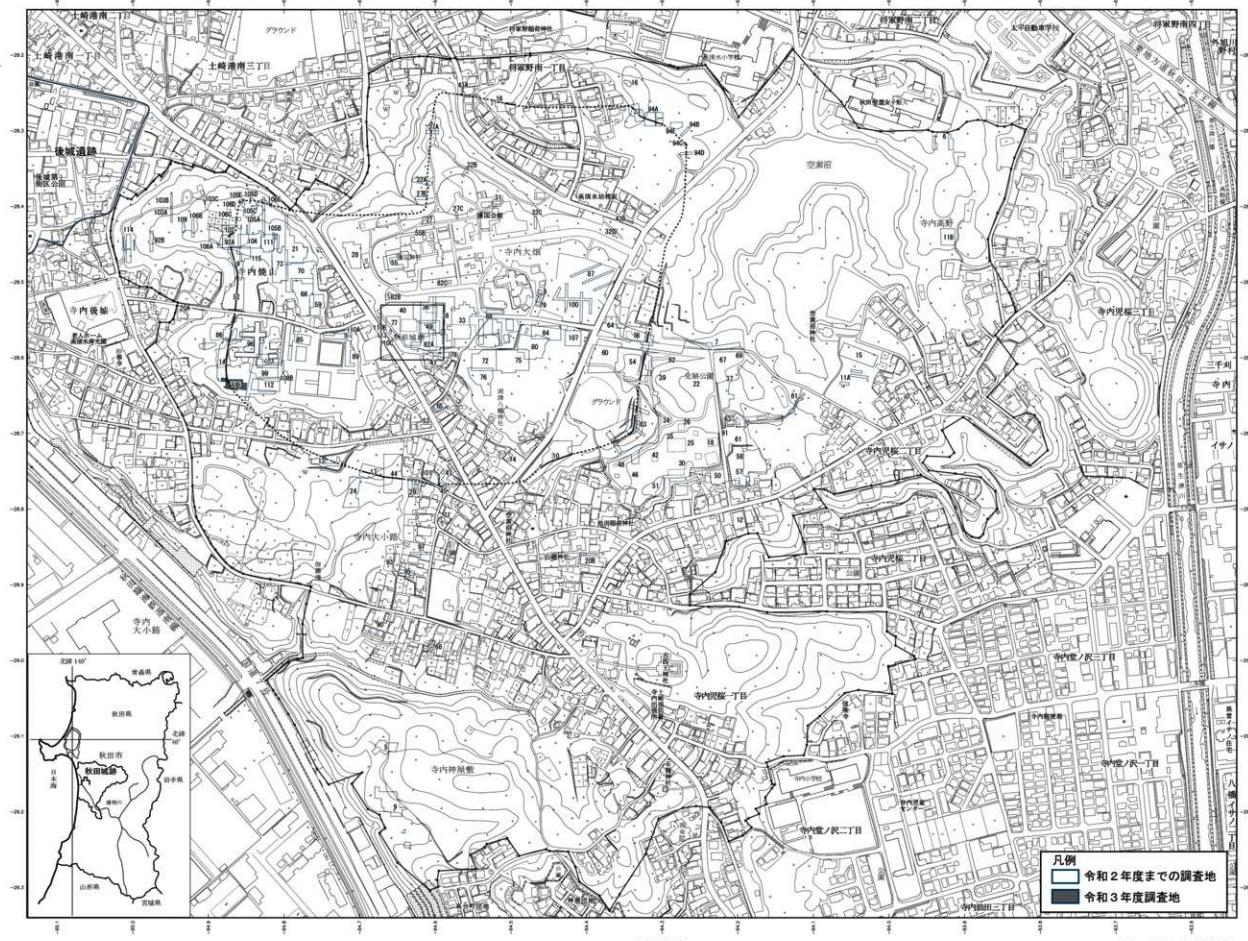


- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。

- ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
- ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
- ・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。
- ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
- ・遺物実測図の縮尺は、瓦は $1/4$ 、石器 $1/2$ 、その他の遺物は $1/3$ とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真的縮尺は、瓦約 $1/4$ 、石器約 $1/2$ 、その他の遺物は約 $2/5$ とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X=-28,562.592, Y=-64,607.889である。



1:5,000

第1図 秋田城跡発掘調査位置図

秋田市教育委員会

I 調査の計画と実施状況

令和3年度の秋田城跡発掘調査は、第116次調査を実施した（第1図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）6,940,000円のうち国庫補助額3,470,000円（50%）、県費補助額694,000円（10%）、市費2,776,000円（40%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査予定期間
116次	焼山地区南西部	400 m ² (121)	5月1日～8月31日
計		400 m ² (121)	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、第116次調査は令和3年2月12日付け令2城歴第1578号で申請し、令和3年3月19日付け2文庁第1913号で許可された。

令和3年度の発掘調査は、焼山地区的正報告書作成および環境整備計画を踏まえて、周辺の実態把握のために焼山地区南西部を調査対象とし実施した。

第116次調査地は焼山地区南西部、外郭線南西コーナー部にあたり、周辺調査では外郭西辺区画施設（外側城壁）である奈良時代の築地堀跡や、平安時代の木材堀跡等が検出されている。これらは丘陵の西端に沿うように巡っており、今次調査地の西側はそれら区画施設の南西コーナー部にあたると推定された。

また、調査地東隣接地では、9世紀第2四半期～第4四半期に機能した区画施設で囲まれた城内施設が検出されており、区画施設内は、焼土面を伴う小規模な工房と考えられる堅穴建物跡や、複数の焼土面などが検出され、鉄製品や鉄滓、フイゴ羽口が出土することから、鉄製品の生産に関わる施設の性格・機能が把握されている。今次調査は外郭区画施設の位置関係や変遷を明らかにし、城内側の利用状況を把握することを目的に調査を実施した。

調査の結果、調査地は近世以降の歴跡や近現代の搅乱跡が多数検出され、古代の遺構面は大きく削除を受けている状況を確認した。西側においては外郭区画施設を構成すると考えられる遺構が、城内側となる東側においては鉄製品の生産に関わる鍛冶工房と考えられる堅穴状建物跡や焼土面などの遺構が検出された。全体として、掘立柱建物跡1棟、木材堀跡2条、築地堀跡1条、堅穴建物跡5軒、土坑2基、焼土遺構7基、柱掘り方状遺構1基を検出し、焼山地区南西部の利用実態を把握することができた。

令和3年7月31日に第116次調査の現地説明会を開催し、54名の参加があった。令和3年12月2日～3日に文化庁文化財第二課 川畠文化財調査官の調査指導を受けた。令和3年11月25日に宮城県多賀城跡調査研究所 高橋所長の調査指導を受けた。

令和3年度の発掘調査実施状況は下記表2のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査実施期間
116次	焼山地区南西部	385 m ² (116.5)	5月1日～9月14日
計		385 m ² (116.5)	

II 第116次調査報告

1 調査経過

第116次調査は、焼山地区南西部を対象に、令和13年5月1日から9月14日まで調査を実施した。調査面積は385 m²である。

第116次調査は焼山地区南西部、外郭区画施設の南西隅にあたる。周辺調査では外郭西辺区画施設（外側城壁）である奈良時代の築地跡や平安時代の材木跡等が確認されている（第14次調査・第86次調査）。これらは丘陵の西端に沿うように巡っており、今次調査地の西侧はそれら区画施設の南西コーナー部にあたると推定される（第1図）。

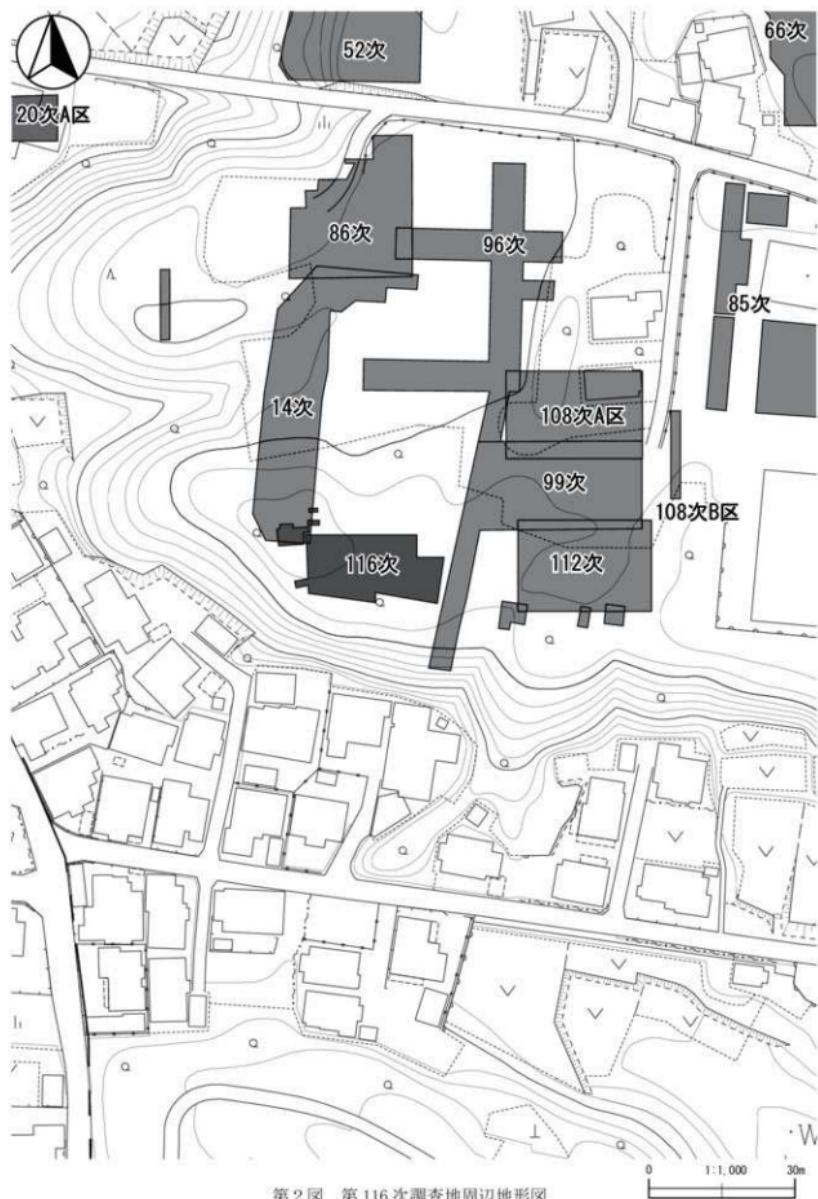
また城内西半部の焼山地区においては、政庁西側の地区中央から外郭西門付近の北西部にかけて、8世紀後半から9世紀にかけて変遷する大規模建物群（倉庫群）が検出されている。その南西側、今次調査地の東隣接地の焼山地区南西部周辺では、9世紀第2四半期以降に造営された区画施設を伴う城内施設が検出された（第85次調査・第96次調査・第99次調査）。区画の範囲は、最大で東西60m、南北約60mの方形となる可能性がある。城内施設の性格については、焼土面を伴い工房と考えられる竪穴建物跡や、複数の焼土面などが検出され、鉄製品や鉄滓、フイゴ羽口が出土することから、鉄製品の生産に関わる施設の性格・機能が把握されている（第108次調査・第112次調査）。また、硯や転用硯も出土していることから、生産に関連する実務官衙としての性格・機能を持つ可能性もある。

これらのことから、今次調査地の西側については、第14次調査で検出された築地跡や材木跡の延伸部分と屈曲部分が存在している可能性が高く、城内側である東側については鍛冶等生産施設に伴う遺構が存在する可能性が高い場所であると推定された。今後、焼山地区的正報告書作成のためにも、外郭区画施設の位置関係や変遷の把握、城内側の利用状況の把握が必要あり、調査を実施した（第2図）。

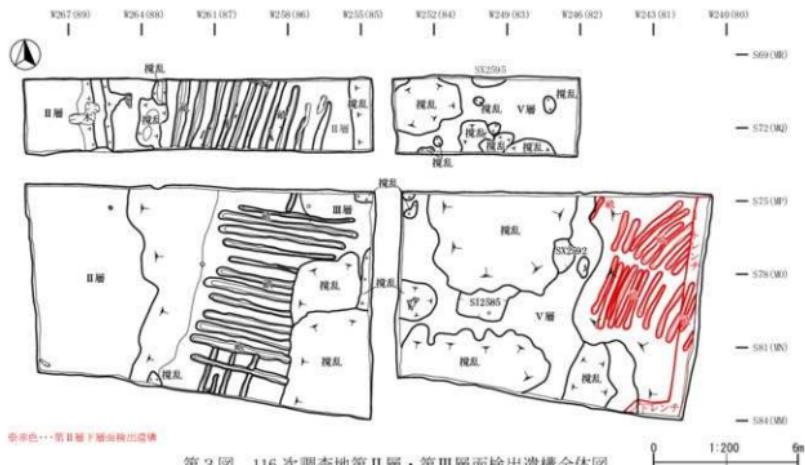
今回調査を行った第116次調査地の旧地形は、西側の丘陵端部から東へゆるやかに下る傾斜面だったと考えられるが、中世や近世から現代にかけての造成によって東側は大きく削平を受け、現在は西側に高まりのある段状地形となっている。調査区については、南北方向に東西28m×南北14mに設定した。また、今回の調査地全体で確認された築地跡の位置や延伸方向を把握するため、西側を一部拡張およびトレンチを入れた。

調査方法は、面的掘り下げを行い遺構の検出確認を行った後、時期等遺構内容の把握が必要な検出遺構について、保存に留意しながら半裁またはベルト等を残す形で遺構調査を行った。また下層遺構を追究する必要がある部分については、記録化後、部分的に掘り下げを行った。

調査は、まず調査地の樹木伐採などの整備を行った後、基準杭測量、調査区の設定を行った。調査区設定後、重機による表土・造成土の除去を行った（5月1日～5月10日）。その後、人手による造成土の除去を行った（5月11日～6月3日、第3図）。造成土の除去とともに、直下の面で調査区全体の精査・遺構検出を行った。古代以降に整地されたと考えられる第III層と、築地跡後に整地されたと考えられる第IV層面を検出し、第III層は調査地西側の低地、第IV層は調査地西側の高まりから斜面にかけてのみ堆積している状況を確認した。またこの時点で削平と搅乱により最下層の整地層である第V層面が露出している地点があった。西側よりの第IV層面からはSA2580材木跡、SA2581材木跡を検出した。また、SA2580材木跡によって削平を受けたSF2583築地跡を検出した。方向や過年度調査で検出された遺構との関連を確認するために、調査地北西地点に拡張区①を設定し、人手によって表土・造成土の除去を行った。SF2583築地跡と重複し、それを一部掘り込む形で、版築状の埋土を伴うSX2582柱掘り方形状遺構を検出した（5月25日～6



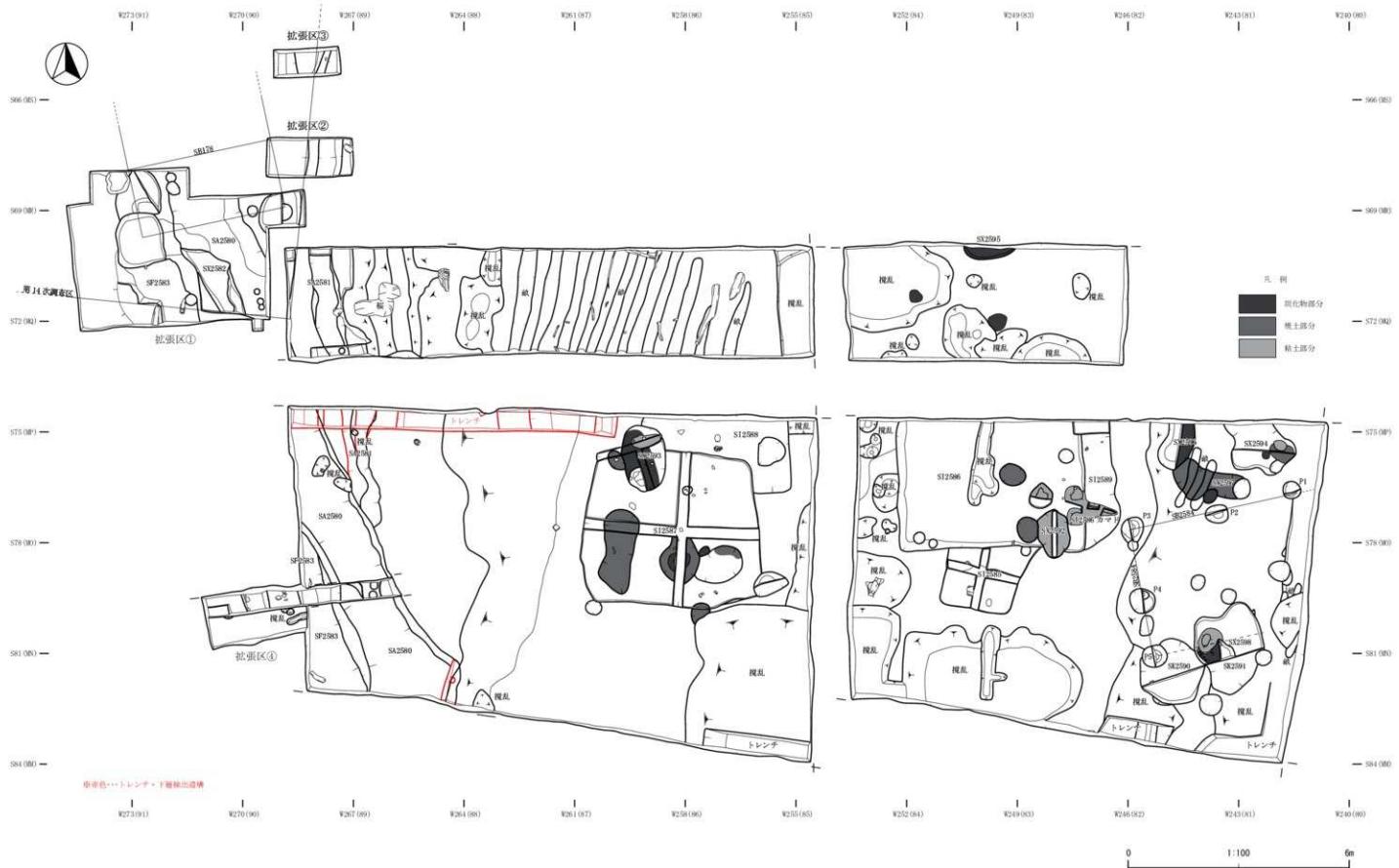
第2図 第116次調査地周辺地形図

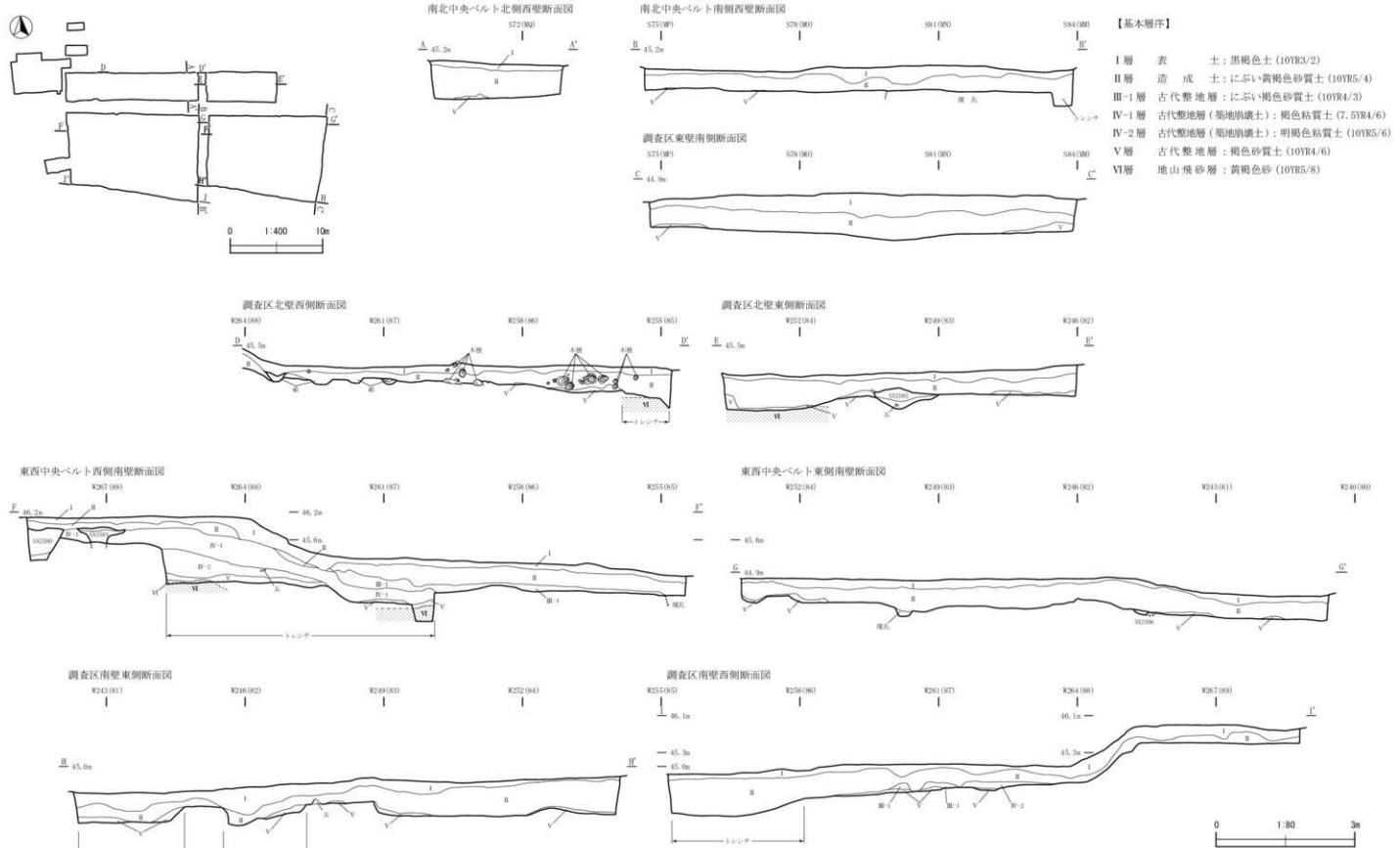


第3図 116次調査地第II層・第III層面検出遺構全体図

月25日)。また平行して、調査地東側で検出されていた擾乱穴や竪の掘り下げを行い、記録化を行った後、第III層の除去を行い、調査区全体の精査・遺構検出を行った。擾乱除去後の第V層面からSB2584 据立柱建物跡、SI2585 竪穴建物跡、SI2586 竪穴建物跡、SI2587 竪穴建物跡、SI2588 竪穴建物跡、SI2589 竪穴建物跡、SK2590 土坑、SK2591 土坑、SX2592 燃土遺構、SX2593 燃土遺構、SX2594 燃土遺構、SX2595 燃土遺構、SX2596 燃土遺構、SX2597 燃土遺構、SX2598 カマド状遺構を検出したが、いずれも擾乱による削平の影響が大きく、床面や遺構底部付近のみ浅く残っている状況を確認した(6月18日～7月27日)。調査地の東側、第V層面で検出された遺構を中心に掘り下げと記録化を行った(8月2日～8月6日)。調査区南西部の一部と拡張区①において確認されていたSF2583 築地塙跡の方向性と性格を把握するため、拡張区④として調査区南西側を一部拡張した。築地塙の積土が遺存していたため、段状高まりの東西を含め断ち割りを行い、記録化を行った。またSA2581 材木塙跡の追求のため、調査地北西にトレーナーを2箇所入れ、調査区北側へ延びていくことと、その方向性を確認した。土層の堆積状況を確認するため、調査区中央ペルト西半部沿いにトレーナーをいれて、整地層の除去を行った(8月10日～8月25日)。

その後、最終状況の全景写真的撮影後、遺物の取り上げ等を行い、調査区壁ならびに土層の記録化を行った(8月26日～31日)。全調査区の記録化の後、機材撤収およびバックホーと人手による埋め戻しを行い調査が終了した(8月31日～9月14日)。





第5図 第116次調査地土層断面図

2 検出遺構と出土遺物

今次調査では、主な古代の遺構として、築地塀1条、材木塀跡2条、柱堀り方状遺構1基、掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡5軒、土坑2基、焼土遺構7基を検出し、調査地西側で外郭区画施設と、調査地中央から東側で鉄製品生産に関わると考えられる竪穴建物跡や焼土遺構等の遺構群を確認している。各遺構は第IV～V層面で検出されており、第II層は近代から現代にかけて、第III層・第IV層・第V層は古代に整地された層であると考えられる。調査地全体で近世以降の耕作の痕跡や、現代の造成の痕跡が確認されており、古代の遺構面は大きく削平を受けていた。

以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第IV層面検出の遺構と遺物

第IV層は調査地西側にのみ堆積しており、材木塀跡2条、柱堀り方状遺構1基が検出された。

また第IV層に関係する遺構として築地塀1条が検出された。

S A2580 材木塀跡（第6図、図版4）

調査地の北西から南西にかけて第IV-1層面で検出された南北方向の区画施設である。布堀り溝の幅は1.5m～2.0m、長さ15m以上、深さ70cmの材木塀跡で、北で西に25°振れる。調査区外の南北に延び、調査地南西側でさらに南東方向に40°曲がる。材抜き取り跡や一部に直径約15cm～20cmの丸太材痕跡が連続して確認されていることから材木列塀跡であったと考えられる。位置関係および構造から第14次調査で検出されたSD176と連続する外郭区画施設である。SA2581、SX2582、SF2583と重複し、いずれよりも新しい。

S A2581 材木塀跡（第6図、図版4）

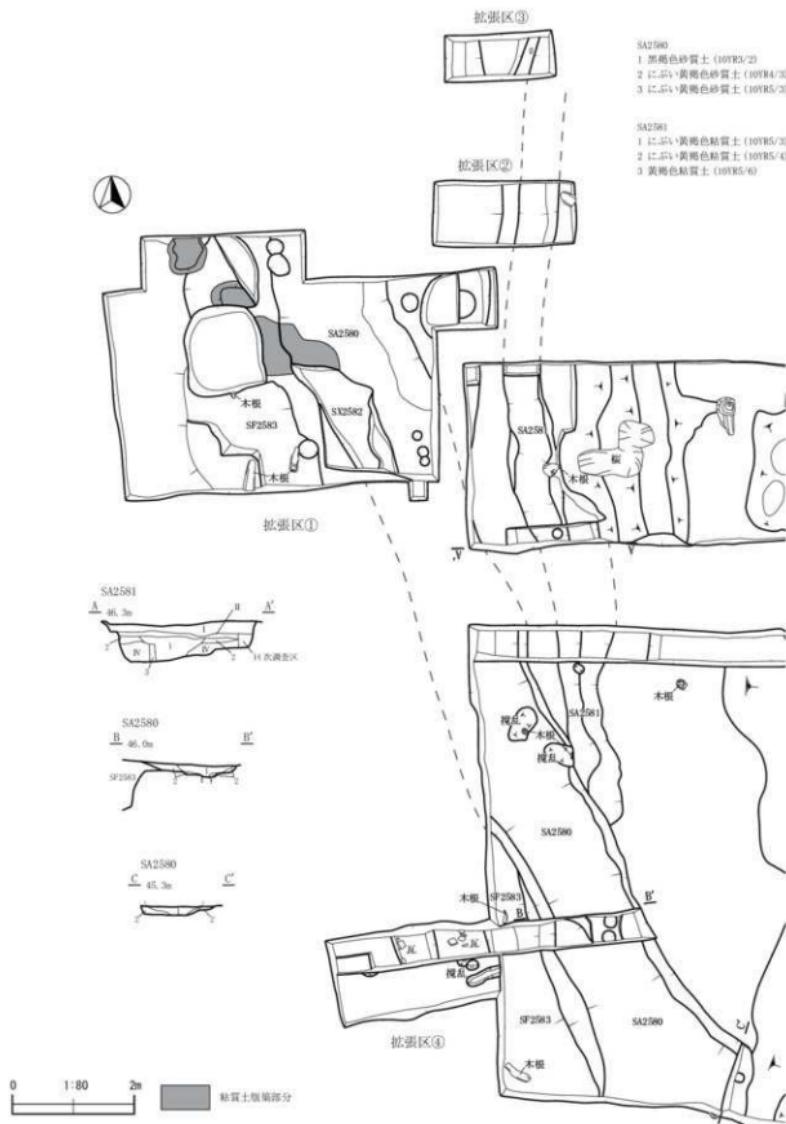
調査区の北西から西側中央にかけて第IV-1層面で検出された南北方向の区画施設である。布堀り溝の幅は50～60cm、長さ7m以上、深さ30cmの材木塀跡で、方向は北で西に8°振れる。調査区外の北に延び、南方向にも延びていたと考えられるが、SA2580と重複し、不明となっている。材抜き取り跡や直径約15cmの丸太材痕跡が一部間隔をあけ確認されていることから柱列塀跡であったと考えられる。SA2580と重複し、これより古い。

S A2581 材木塀跡出土瓦（第7図1、図版9）

瓦（第7図1）：埋土出土の丸瓦である。凸面は綱目叩き後、ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕がある。いぶし焼成により黒色を呈し、軟質である。やや摩耗している。

S X2582 柱堀り方状遺構（第8図、図版4・5）

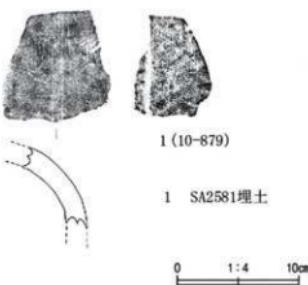
調査区の北西、拡張区①で検出された堀り方状遺構である。幅1.4m、長さ2.2m以上の南北に長いプランを呈し、深さ55cmである。長軸方向は北で西に30°振れる。掘り込み後に、粘土と砂を互層的に版築し埋め立てている。柱抜き取り痕や柱痕跡は認められず、上部の削平により不明瞭であるが、掘り込み事業となる可能性がある。SF2583、SA2580と重複し、SF2583より新しく、SA2580より古い。



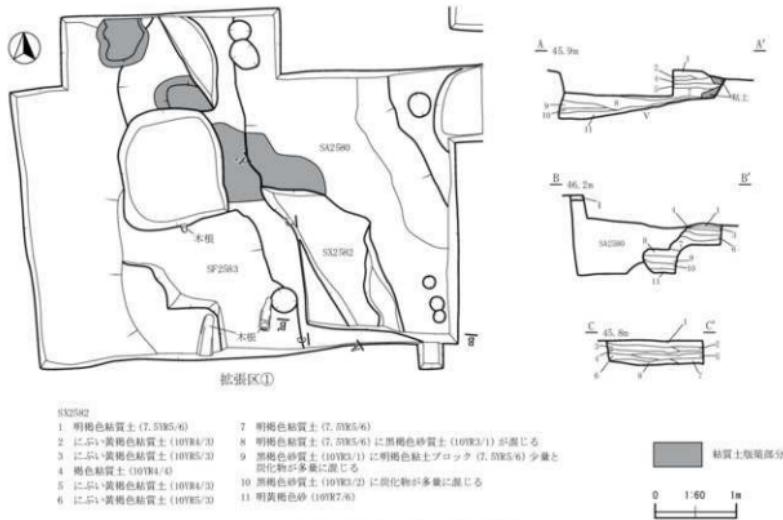
第6図 SA2580・SA2581 材木塙跡

S F2583 築地壠跡（第9図、図版5）

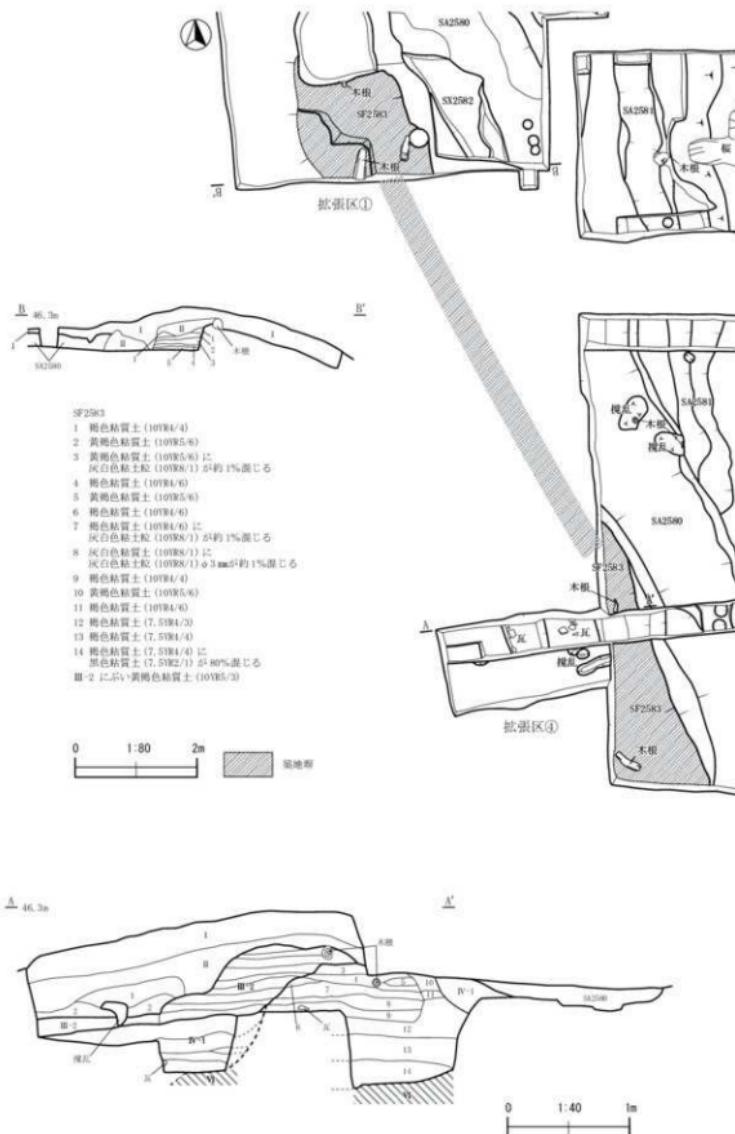
調査区の北西から南西にかけて検出された南北方向の区画施設である。遺存状況の良い南西地点では、基底幅1.3m以上、遺存高45cmであり、南で約30°東に振れる。褐色粘質土とぶい黄褐色粘質土の積土を、幅5cm~10cmで版築した互層が確認される。積み土は極めて硬くしまる。東側に幅20cm、厚さ10cmの犬走り部分が認められる。築地壠と犬走りの下には幅2m以上、深さ70mの粘土質の盛土が認められ、築地壠構築に伴い、基壇状の基礎整地が行われたと考えられる。築地壠積土の直下基壇状整地の直上部分には瓦の破片が敷かれており、積み土のずれ防止や基礎の強化を意図した基礎地業が行われた痕跡と考えられる。築地壠の西側にはブロック状の築地壠土が厚く確認され、築地壠は主として西側に崩壊したことが想定される。



第7図 SA2581 材木壠跡出土瓦



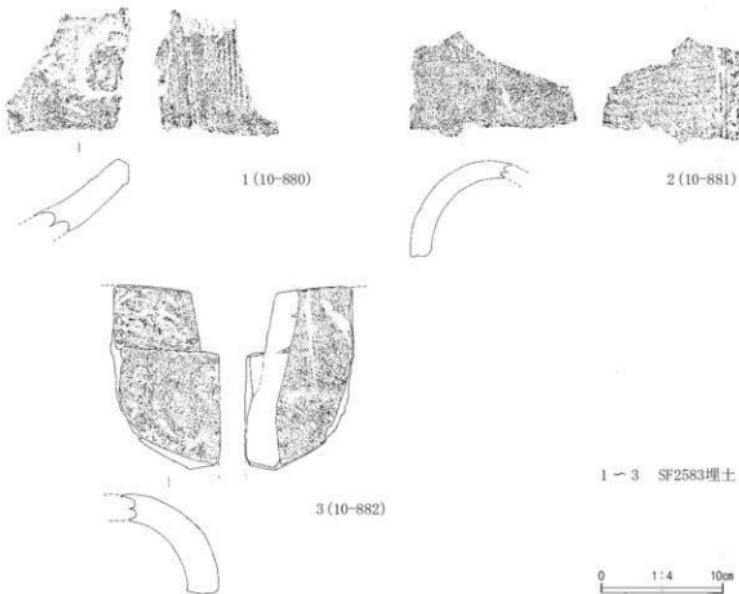
第8図 SX2582 柱掘り方状遺構



第9図 SF2583 築地跡

SF2583 築地壠出土遺物（第10図1～3、図版9）

瓦（第10図1～3）：1は基段状整地直上より出土した平瓦であり、凸面には縄目叩き痕。凹面には布目圧痕がある。焼成は軟質であり、灰白色を呈す。摩耗している。2は築地壠壙土出土の丸瓦である。凸面は縄目叩き後、ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕が見られる。焼成は軟質であり、いぶし焼成により黒色を呈す。やや摩耗している。3は築地壠壙土出土の有段の丸瓦である。凸面は縄目叩き後、ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕が見られる。焼成は軟質であり、灰白色を呈す。



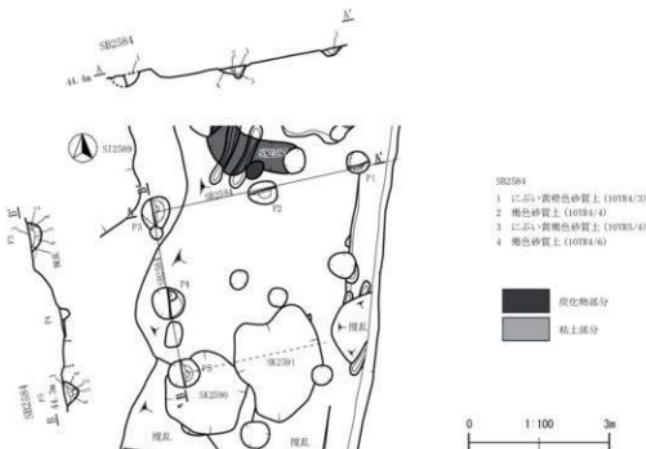
第10図 SF2583 築地壠跡出土瓦

②第V層面検出の遺構と遺物

第V層は調査地全体で確認されており、掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡5軒、土坑2基、焼土遺構7基が検出された。いずれの遺構も大きく削平を受けており、削平により失われた上層の整地面より掘りこまれた遺構であると考えられる。

SB2584 掘立柱建物跡（第11図、図版6）

調査地の南東で検出された、梁間2間（1.8+1.6）×桁行2間以上（2.4+2.4+…）の東西棟の建物である。柱掘り方は一辺1.3m～1.5mの歪んだ方形、深さ約20cm程度しか遺存していない。柱痕跡は直径10cmで柱抜き取りを受けている。桁行南側柱筋が北で15°西に振れる。SK2590と重複し、これより新しい。



第11図 SB2584 掘立柱建物跡

S B2584 掘立柱建物出土遺物 (第12図1、図版9)

須恵器 (第12図1) : 埋土より出土した台付壺の底部破片である。ヘラ切り、台取り付け後、ナデ調整を施す。



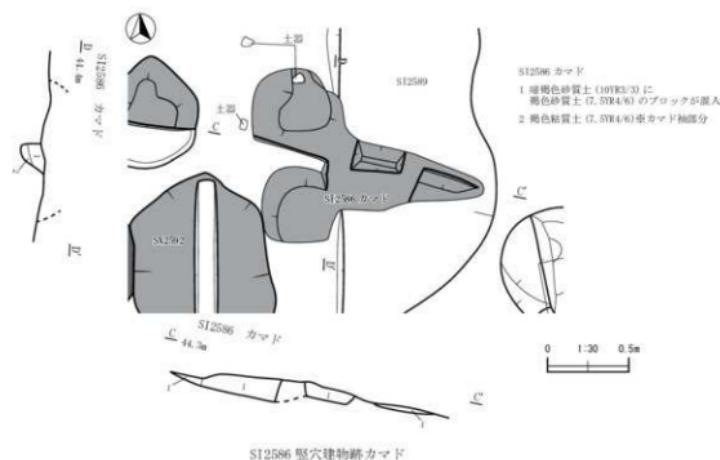
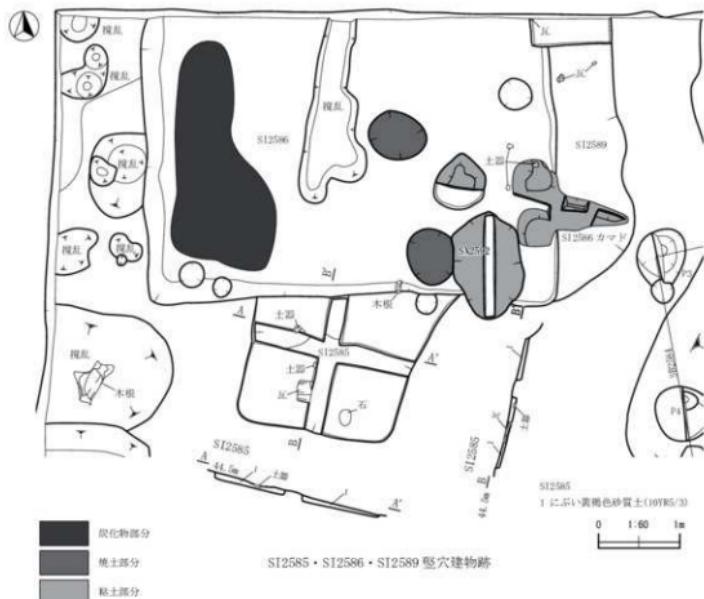
第12図 SB2584 掘立柱建物跡出土遺物

S I 2585 穫穴建物跡 (第13図、図版6・7)

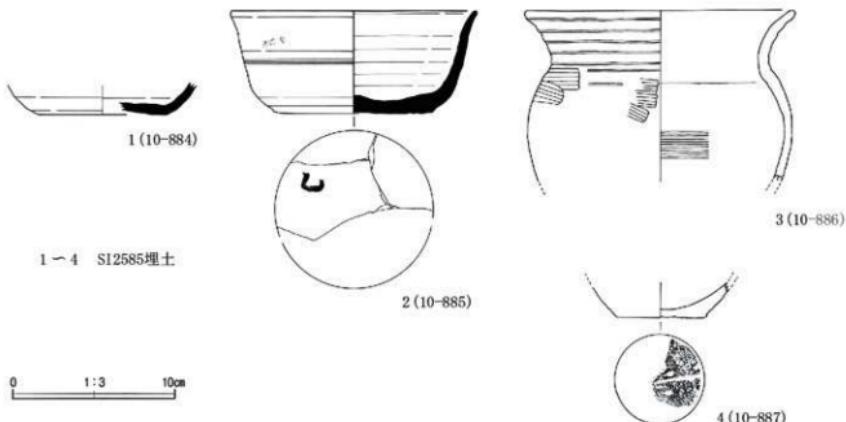
調査地の東で検出された竪穴建物跡である。東西2.2m、南北1.8m以上の方形を呈す。住居壁高は3cmのみ遺存している。東壁が北で東に15°振れる。SI2586と重複し、これより古い。

S I 2585 穫穴建物跡出土遺物 (第14図1~4、図版9)

須恵器 (第14図1・2) : ともに埋土出土の壺である。1は底部破片であり、ヘラ切り後、ナデ調整を施す。2はヘラ切り無調整で、体部外面に横走沈線が施されている。煤状炭化物が付着している。底面外面に「乞カ」の墨書きがある。



第13図 SI2585・SI2586・SI2589 壁穴建物跡



第14図 SI2585 竪穴建物跡出土遺物

土師器（第14図3・4）：ともに埋土出土の小型甕である。3は口縁部から体部上半にかけての破片であり、口縁部から頸部にかけて多条の段状横走沈線がある。体部外面に横方向のハケ目、体部内面に横方向のカキ目がある。4は底部破片であり、底部外面に木葉痕がある。3と同一個体である可能性がある。

S I 2586 竪穴建物跡（第13図、図版6・7）

調査地の東で検出された竪穴建物跡である。東西5m、南北3.5m以上の方形を呈する。近現代のものと考えられる攪乱が上部に重なり大きく削平を受けていたため、壁と床面のみ遺存していた。壁高は約20cm。東壁がほぼ真北方向。南東脇にカマドを伴う。床面に焼土面や炭化物面が多数確認されている。SI2585、SI2589、SX2592と重複しており、SI2585、SI2589より新しく、SX2592より古い。

S I 2586 竪穴建物跡出土遺物（第15図1、図版9）

須恵器（第15図1）：埋土出土の坏口縁部から体部の破片である。



第15図 SI2586 竪穴建物跡出土遺物

S I 2587 壁穴建物跡（第16図、図版7）

調査地の中央西寄りで検出された壁穴建物跡である。東西軸5m、南北軸4.3mの方形を呈する。壁高5cmのみ遺存している。西壁はほぼ真北方向。炉跡と焼土面を伴う。また埋土には中央から南側にかけて炭化物や被熱した細かい土器片が多数含まれていた。SI2588、SX2593と重複しており、SI2588より新しく、SX2593より古い。

S I 2587 壁穴建物跡出土遺物（第17図1～8、図版9）

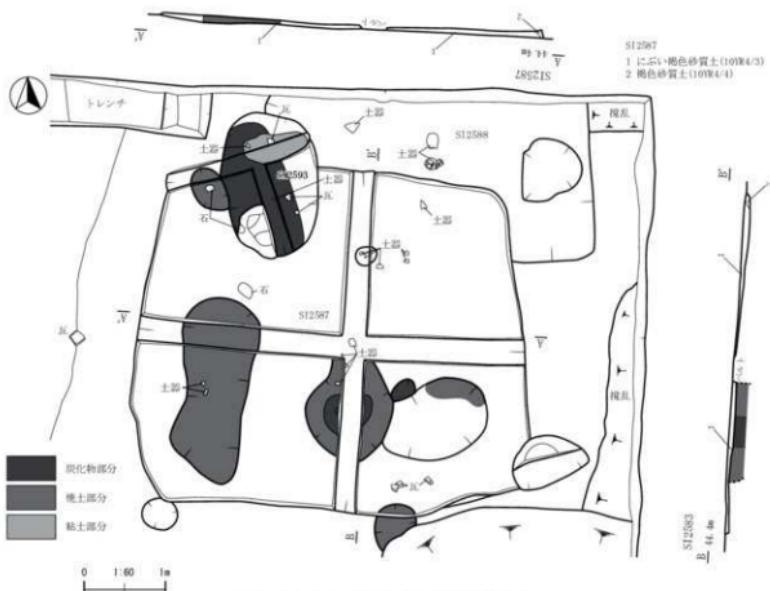
須恵器（第17図1）：埋土出土の壺底部破片である。ヘラ切り後ケズリ調整を施す。底部外面に判読不明の墨痕がある。

赤褐色土器（第17図2～4）：いずれも埋土出土の壺である。2は底部破片であり、糸切り無調整である。体部内面に煤状炭化物が付着している。3は底部破片であり、糸切り無調整である。底部内外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。4は糸切り無調整である。体部内外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。

石製品（第17図5）：被熱した石破片である。花崗岩製の金床石の一部と考えられる。

土製品（第17図6）：フイゴ羽口の破片である。

鉄製品（第17図7・8）：いずれも埋土出土の鐵鏃である。7は上部および下部が欠損している。8は刃部先端および基部が欠損している。



第16図 SI2587・SI2588 壁穴建物跡

S I 2588 竪穴建物跡（第16図、図版7）

調査地の中央北寄りで検出された竪穴建物跡である。東西4m、南北1.8m以上の方形を呈する。東壁はほぼ真北方向。SI2586と重複し、これより古い。

S I 2588 竪穴建物跡出土遺物（第18図1～4、図版10）

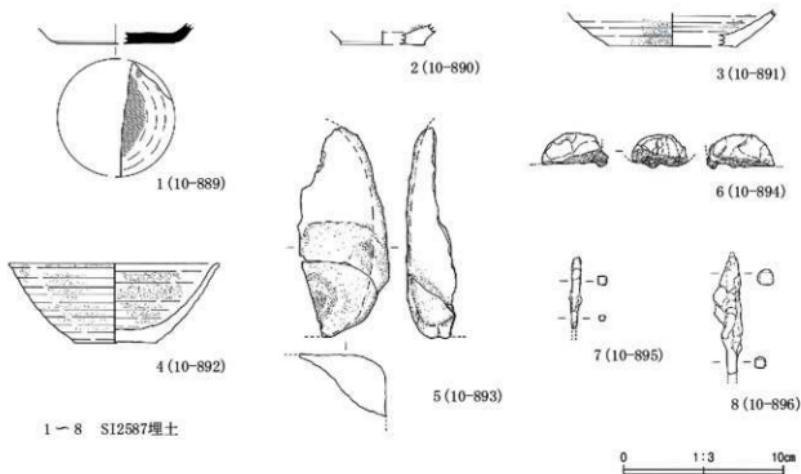
須恵器（第18図1）：埋土出土の壺体部破片である。外面に平行叩き痕、内面体部に下半同心円状當て具痕、底部に平行當て具痕がある。内面を硯に転用している。

赤褐色土器（第18図2・3）：2は埋土出土の壺である。糸切り無調整で、被熱している。3は埋土出土の壺である。外面体部上半にカキ目調整、外面体部下半に手持ちヘラケズリ調整、内面上半に横方向のハケ目調整を施す。体部上部外面に煤状炭化物が付着している。

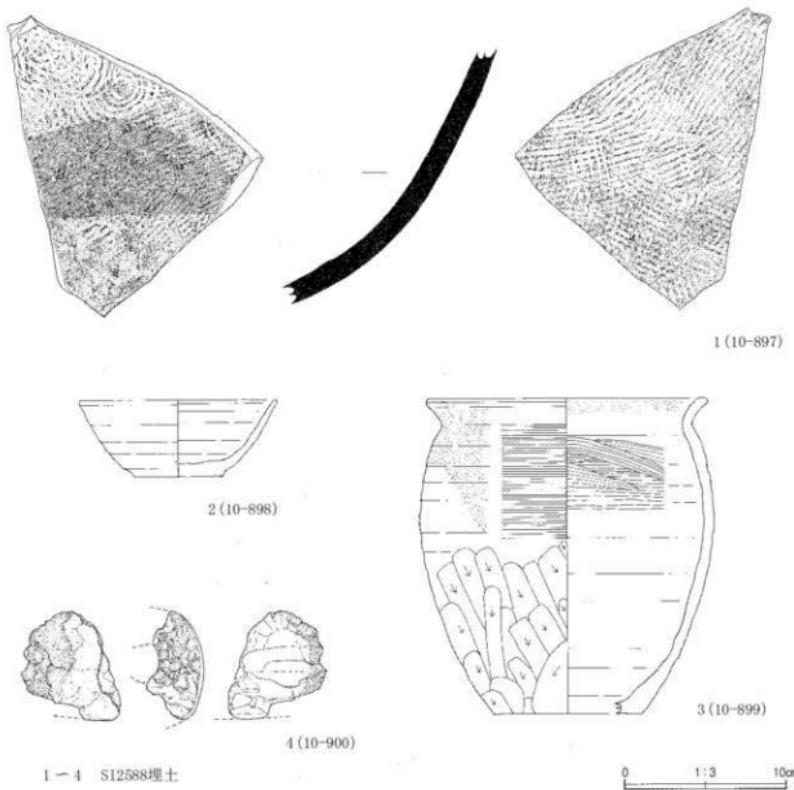
土製品（第18図4）：フイゴ羽口の破片である。

S I 2589 竪穴建物跡（第13図、図版7）

調査地の東で検出された竪穴建物跡である。南北2m以上、東西0.7m以上、壁高約10cm。東壁はほぼ真北方向。粘質土で埋め立てられている。SI2586と重複し、これより古い。



第17図 SI2587 竪穴建物跡出土遺物



第18図 SI2588 壺穴建物跡出土遺物

SK2590 土坑（第19図、図版8）

調査地の南東で検出された土坑である。長軸2.5m、短軸1.8m、深さ16cm。歪な円形を呈す。SK2591と重複し、これより新しい。

SK2590 土坑出土遺物（第20図1、第21図1、図版10）

須恵器（第20図1）：埋土出土の高台付壺の底部破片である。高台外側と体部が欠損している。糸切り後、ナデ調整を施す。

瓦（第21図1）：埋土より出土した平瓦であり、凸面には綱目叩き痕、凹面には布目圧痕が見られる。焼成はやや不良で軟質であり、にぶい黄橙色を呈す。摩耗している。糸切り痕がある一枚作りである。

SK2591 土坑 (第19図、図版8)

調査地の南東で検出された土坑である。長軸2.2m、短軸1.6m、深さ20cm。歪な円形を呈す。SK2590、SX2598と重複し、SK2590より古く、SX2598より新しい。

SK2591 土坑出土遺物 (第22図1~3、図版10)

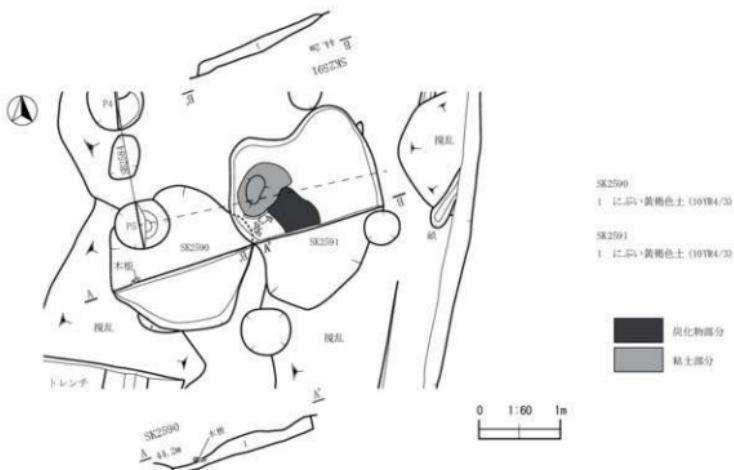
須恵器 (第22図1) : 埋土出土の台付壺である。底部ヘラ切りで体部下端にケズリ調整を施す。台取り付け後ナダ調整を施す。

赤褐色土器 (第22図2) : 2は埋土出土の壺底部破片である。糸切り無調整で、被熱している。

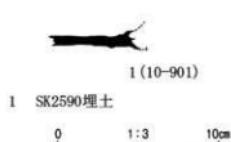
鉄製品 (第22図3) : 埋土出土の鉄鏃である。下部が欠損している。

SX2592 烧土遺構 (第23図、図版8)

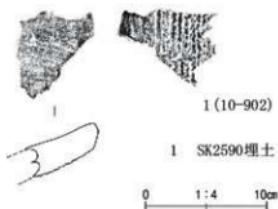
調査地の南東で検出された焼土遺構である。長軸1.8m、短軸1.5m、深さ不明。不整形を呈す。全体が削平されている。しまりの強い粘質土によって構築され、焼土面を伴う。SI2586と重複し、これより新しい。



第19図 SK2590・SK2591 土坑



第20図 SK2590 土坑出土遺物



第21図 SK2590 土坑出土瓦



第22図 SK2591 土坑出土遺物

S X2593 焼土遺構（第23図、図版7）

調査地の中央西寄りで検出された焼土遺構である。長軸1.7m、短軸1.5m以上、深さ10cm。不整形を呈す。全体が削平されている。焼けた粘土ブロック、焼土と多量の炭化物を含む。焼土面を伴い本来は炉のよくな構造であったと考えられる。SI2587・SI2588と重複し、これより新しい。

S X2593 焼土遺構遺物（第25図1～4、図版11）

赤褐色土器（第25図1～3）：いずれも埋土出土の坏である。1は底部破片で、糸切り無調整である。外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。2は底部から体部の破片であり、糸切り無調整である。体部内面に煤状炭化物付着し、全体に強く被熱している。3は口縁部破片であり、外外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。

石製品（第25図4）：埋設した上面露出部分が被熱した金床石と考えられる。花崗岩製である。

S X2594 焼土遺構（第23図、図版8）

調査地の東で検出された焼土遺構である。長軸1.4m以上、短軸30cm以上、深さ45cm。不整形を呈す。炉跡と考えられる焼土面を伴う粘土による構築物である。埋土に炭化物を多量に含む。

S X2594 焼土遺構遺物（第25図5、図版11）

赤褐色土器（第25図5）：埋土出土の坏底部破片である。糸切り無調整である。

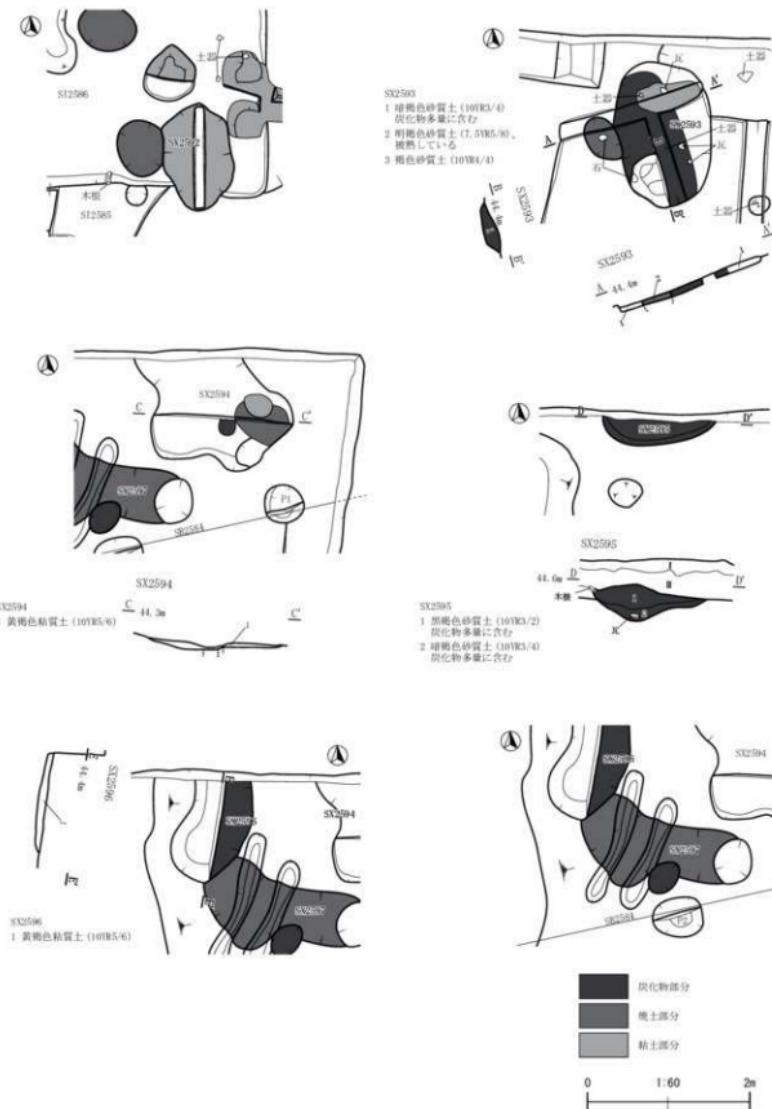
S X2595 焼土遺構（第23図、図版8）

調査地の北東で検出された焼土遺構である。長軸1.2m以上、短軸80cm、深さ45cm。不整形を呈す。埋土に多量の炭化物を含む。

S X2595 焼土遺構遺物（第25図6～8、図版11）

赤褐色土器（第25図6・7）：いずれも埋土出土の坏で、糸切り無調整である。6は全体に煤状炭化物が付着し、被熱している。7は体部内外面に煤状炭化物が付着している。灯明皿として使用していたと考えられる。

土製品（第25図8）：フイゴ羽口の破片である。



第 23 図 SX2592 ~ SX2597 燃土遺構

S X2596 焼土遺構（第23図、図版8）

調査地の南東で検出された焼土遺構である。長軸1.2m以上、短軸80cm。深さ10cm。不整形を呈す。埋土に炭化物を含む。SX2597と重複し、これより新しい。

S X2596 焼土遺構遺物（第25図9、図版11）

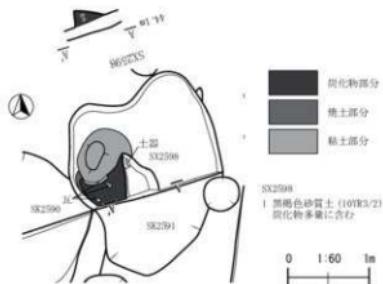
須恵器（第25図9）：埋土出土の坏である。ヘラ切り後、丁寧なナデ調整を施す。全体に煤状炭化物付着し、被熱している。

S X2597 焼土遺構（第23図、図版8）

調査地の南東で検出された焼土遺構である。長軸2.2m、短軸90cm。深さ不明。不整形を呈す。しまりの強い粘質土によって構築され、部分的に焼上面を伴う。SX2598と重複し、これより古い。

S X2598 カマド状遺構（第24図、図版8）

調査地の南東で検出されたカマド状遺構である。形状から住居のカマドであったと考えられるが、近現代の造成や上層遺構の削平により、カマド部分だけが遺存して検出されたと考えられる。カマドの袖部であると考えられる粘土による構築物に、多量の炭化物を伴う。SK2591と重複し、これより古い。



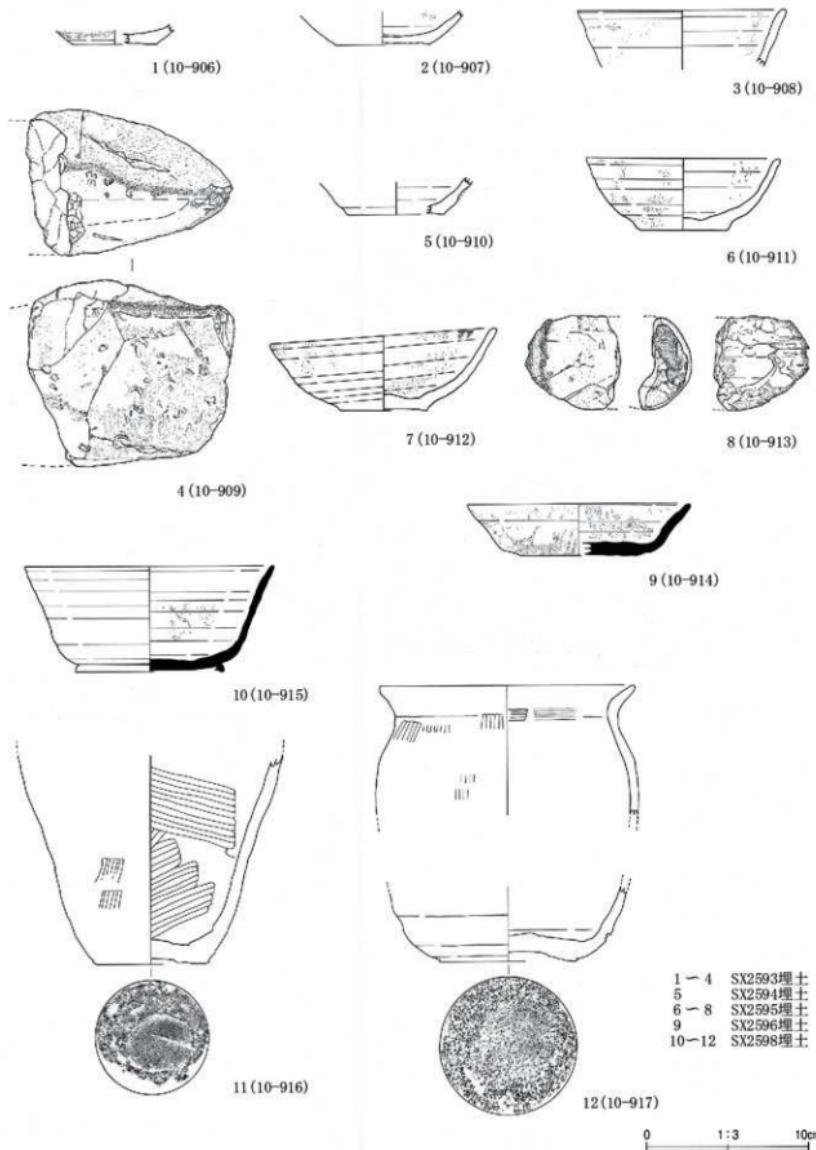
第24図 SX2598 カマド状遺構

S X2598 カマド状遺構出土遺物（第25図10～12、第26図1、図版11・12）

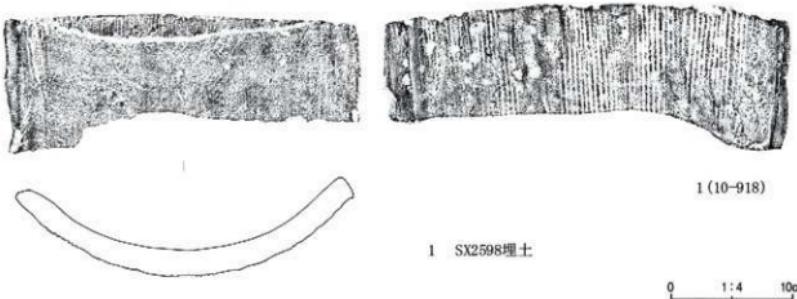
須恵器（第25図10）：埋土出土の台付坏である。ヘラ切りで台取り付け後、ナデ調整を施す。

土師器（第25図11・12）：いずれも埋土出土の甕である。11は長胴甕の底部である。外面に縦方向のハケ目調整後、ナデ調整、内面に横方向の粗いハケ目調整を施す。底部は砂底でナデ調整を施す。12は長胴甕の口縁部から上半部と、底部破片である。体部外面に縦方向のハケ目調整、体部内面に横方向のハケ目調整を施す。底部は砂底である。

瓦（第26図1）：埋土より出土した平瓦であり、凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が見られる。砂粒が多い。焼成や不良で、にぶい黄橙色を呈す。一枚作りで糸切り痕がある。



第25図 SX2593～SX2596 焼土遺構・SX2598 カマド状遺構出土遺物



第26図 SX2598 カマド状遺構出土瓦

3 基本層序および各層出土遺物

基本層序（第5図）

今回調査を行った第116次調査地の旧地形は、西から東へ下る傾斜面だったと考えられるが、近代から現代にかけての造成によって東側は大きく削平を受け、現在は西側に高まりのある段状地形となっている。

以上の土地利用状況を踏まえて、第116次調査地の基本層序をまとめると以下のようにになる。

第I層 表土：現表土。黒褐色土(10YR3/2)。調査地全体に堆積する。

第II層 造成土：にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)。近代から現代にかけての造成土。調査地全体に検出される。攪乱を検出している。

第III層 古代整地層：今年検出された古代最上層の整地層。以下のように細分される。

第III-1層：にぶい褐色砂質土(10YR4/3)。掘削等により歓の検出面となっている。調査区西側から中央の低地にのみ堆積する。

第III-2層：にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3)を主体とする。固くしまった盛土状の整地層として調査地西部中央から南側にかけてのみ検出される。

第IV層 古代整地層：築地跡の崩壊土を含んだ古代の整地層である。調査区の西側から斜面に広がっており、現況の西側の土手状高まりを構成している主要部分である。第IV-2層は調査区中央に入れたサブレンチ内の断面でのみ確認した。以下のように細分される。

第IV-1層 古代整地層：褐色粘質土(7.5YR4/6)。SA2580、SA2581、SX2582が検出された。

第IV-2層 古代整地層：明褐色粘質土(10YR5/6)。築地跡崩壊土と瓦片を多く含む。

第V層 古代整地層：褐色砂質土(10YR4/6)。調査地全体に堆積する。掘削等により、SF2583、SB2584、SI2585、SI2586、SI2587、SI2588、SI2589、SK2590、SK2591、SX2592、SX2593、SX2594、SX2595、SX2596、SX2597、SX2598の検出面となっている。

第VI層 地山飛砂層：黄褐色砂(10YR5/8)。調査地全域で地山となっている。

第 I 層 出土遺物 (第 27 図 1~15、第 29 図 1・2、図版 12・14)

須恵器 (第 27 図 1~8) : 1 は表土より出土、ほかは搅乱より出土している。1 は長頸壺の口縁部から頸部にかけての破片である。2 は壺底部破片である。ヘラ切り後ナデ調整を施す。底部外面に「九ヵ」の墨書がある。3 は壺底部破片であり、糸切り後、外周のみケズリ調整を施す。底部内面を硯に転用している。4 は壺底部破片であり、糸切り後全周ケズリ調整を施す。底部内面を硯に転用している。5 は体部破片であり、外面に「□（厨ヶ）酒杯」、「□」の4文字以上の判読不明の墨書がある。6 は壺であり、ヘラ切り後ナデ調整を施す。被熱している。7 は壺であり、ヘラ切り後ナデ調整を施す。8 は壺であり、ヘラ切り後丁寧なナデ調整を施す。底部外面を硯に転用している。口縁部に墨痕がある。

陶器 (第 27 図 9) : 灰釉瓶底部破片である。体部下部に簡描き文様がある。

磁器 (第 27 図 10) : 肥前系磁器染付碗である。内面見込みに五弁花文がある。

石製品 (第 27 図 11・12) : いずれも砥石である。11 は凝灰岩製であり 3 面を使用している。12 は凝灰岩製であり、広端部隅に穿穴がある提砥石である。3 面を使用している。

土製品 (第 27 図 13) : 小型の土人形である。

鉄製品 (第 27 図 14・15) : 14 は鎌の刃部破片である。15 は鉄斧である。

瓦 (第 29 図 1・2) : 1 は表土より出土した平瓦であり、凸面は繩目の叩き痕、凹面は布目圧痕が見られる。糸切り痕がある一枚作りである。指痕跡が見られる。焼成や不良で軟質であり、黄褐色を呈す。被熱している。2 は表土より出土した丸瓦である。凸面は繩目叩き後、ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕が見られる。いぶし焼成により黒色を呈し軟質である。やや摩耗している。

第 II 層 出土遺物 (第 28 図 1~10、第 29 図 3・4、図版 13・14)

須恵器 (第 28 図 1) : 蓋破片である。天井部外面にケズリ調整を施す。内面を硯に転用している。

赤褐色土器 (第 28 図 2~4) : 2 は壺底部破片であり、糸切り無調整である。3 は壺であり、糸切り無調整である。被熱している。4 は小型壺であり、底部回転糸切り無調整である。

陶器 (第 28 図 5~7) : 5 は口縁部から体部破片の肥前系陶器灰釉碗である。6 は肥前系陶器皿底部破片である。体部内面鉄釉、外面上半に灰釉を施している。内外面に煤状炭化物が多量に付着している。7 は土瓶急須蓋である。外面は鉄釉地になまこ釉を重ね掛けしている。

磁器 (第 28 図 8・9) : 8 は白磁小壺で、輪花の型打ち成形である。9 は染付皿である。内面に型紙刷りでの文様を施す。

鉄製品 (第 28 図 10) : 鎌の破片である。刃部および茎部が欠損している。

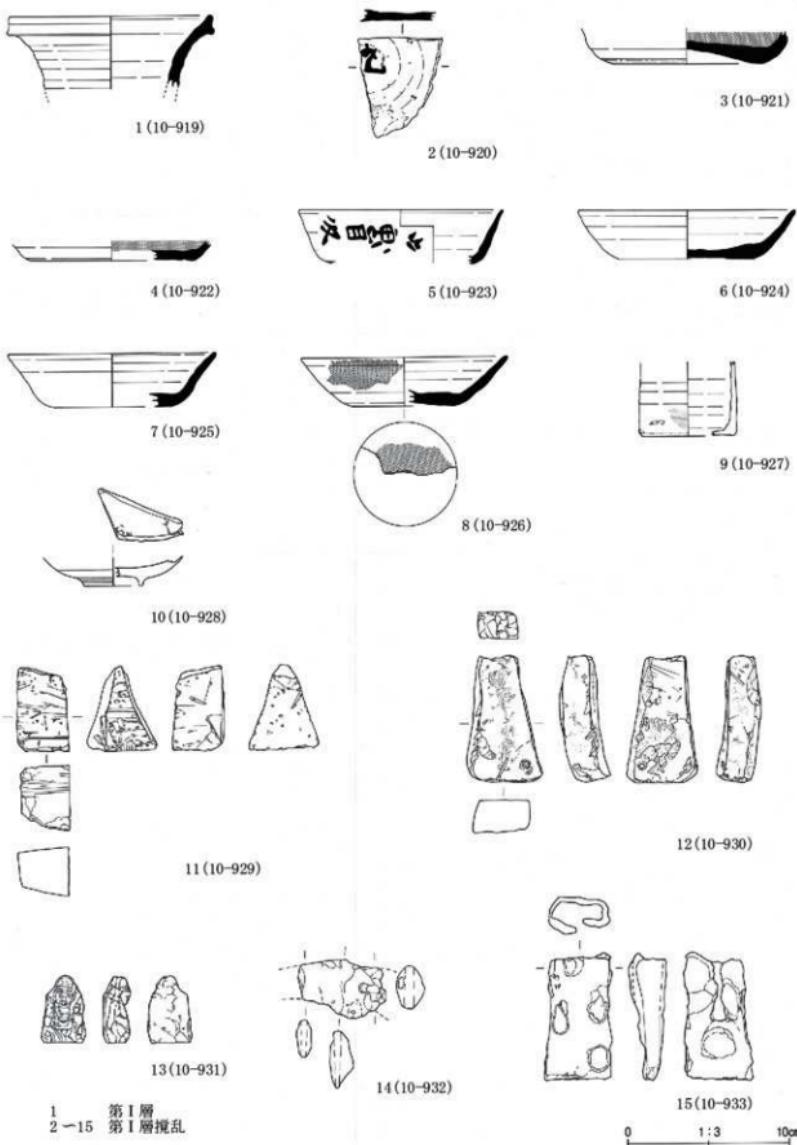
瓦 (第 29 図 3・4) : 3 は平瓦であり、凸面は繩目の叩き後、ナデとハケ目調整を施す。凹面は布目圧痕が見られる。いぶし焼成により黒色を呈し、軟質である。4 は丸瓦である。凸面は繩目叩き後、丁寧なナデ調整を施す。凹面は布目圧痕がみられる。焼成良好でやや軟質であり、黒色を呈す。

第 III 層 出土遺物 (第 28 図 11~16、図版 13)

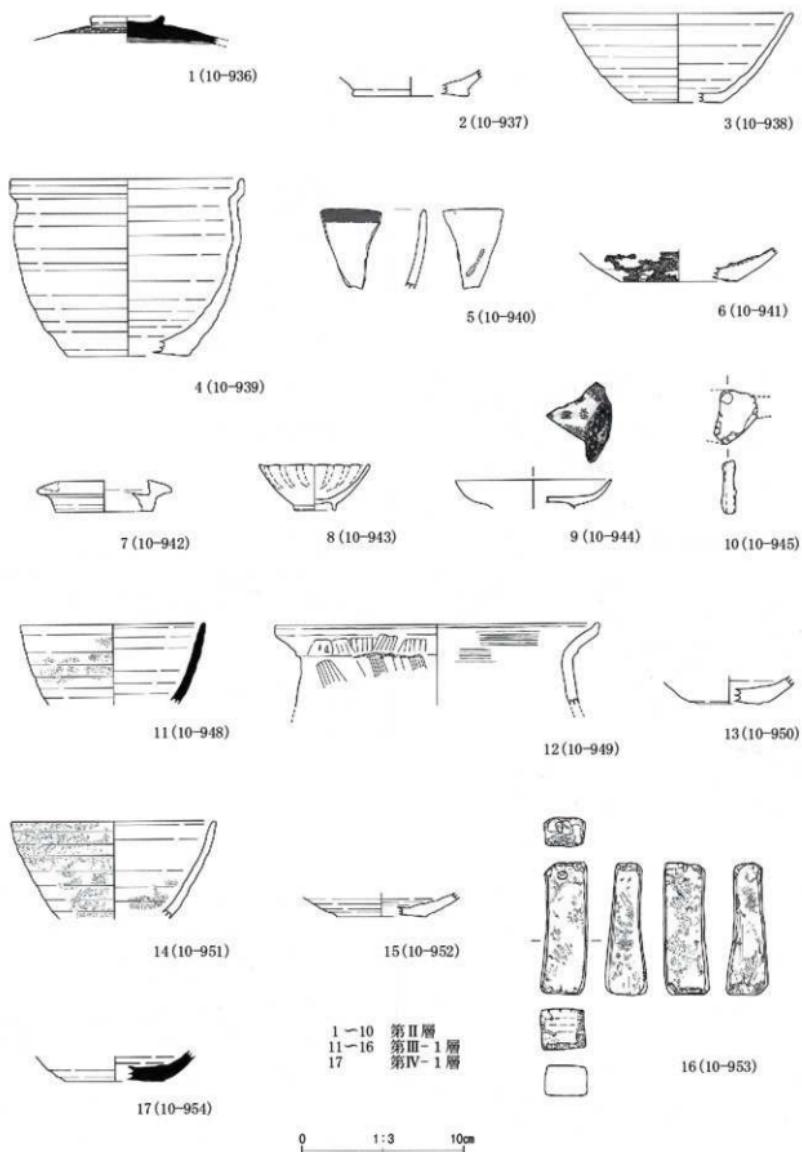
すべて第 III-1 層の出土である。

須恵器 (第 28 図 11) : 壺口縁部から体部の破片である。体部外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。

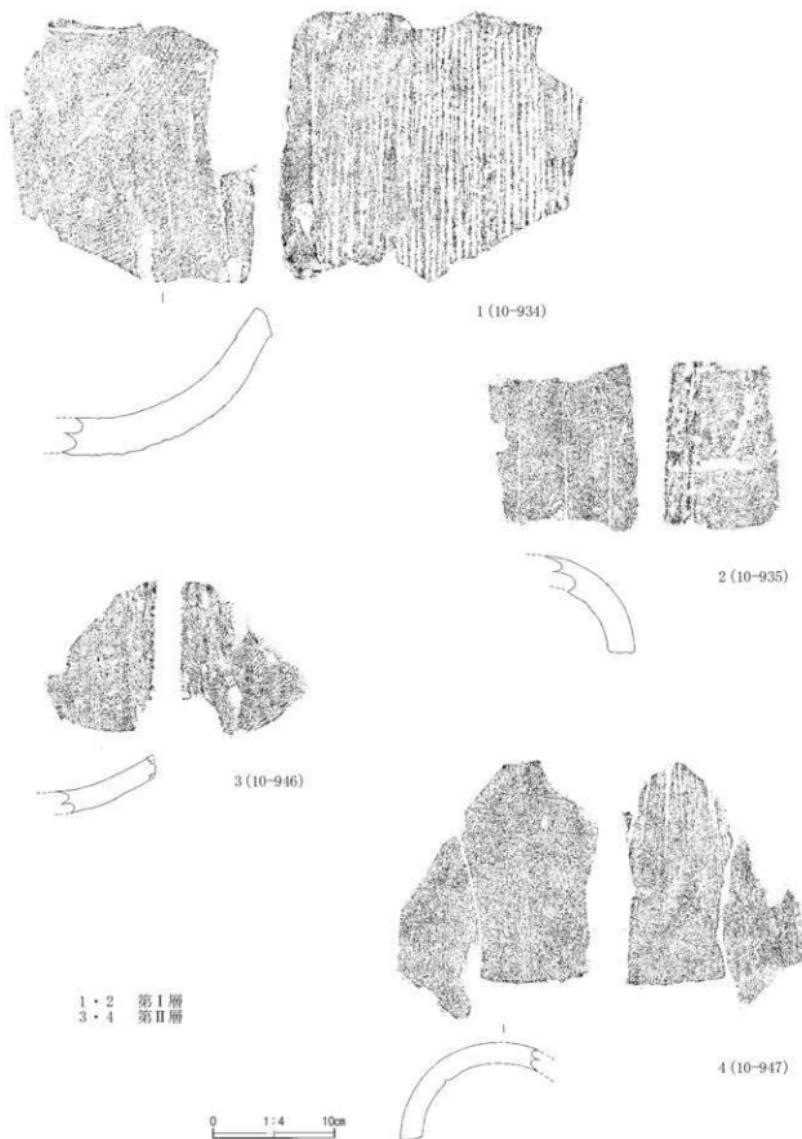
土師器 (第 28 図 12) : 長胴甕口縁部破片である。外面の口縁から頸部にかけて縦方向にハケ目調整後、ナデ調整を施す。体部は微かにハケ目調整が確認できる。口縁内面に横方向にハケ目調整後、ナデ調整を施す。



第27図 第116次調査地第I層出土遺物



第28図 第116次調査地第II層—第IV層出土遺物



第29図 第116次調査地第I層・第II層出土瓦

赤褐色土器（第 28 図 13～15）：13 は壺底部破片である。糸切り無調整である。14 は壺口縁～体部破片である。体部内外面に煤状炭化物が付着し、被熱している。15 は皿底部破片で、糸切り無調整である。

石製品（第 28 図 16）：提砥石である。凝灰岩製であり、上部に穿穴がある。5 面を使用している。

第IV層 出土遺物（第 28 図 17、第 30 図 1～6、図版 13・15）

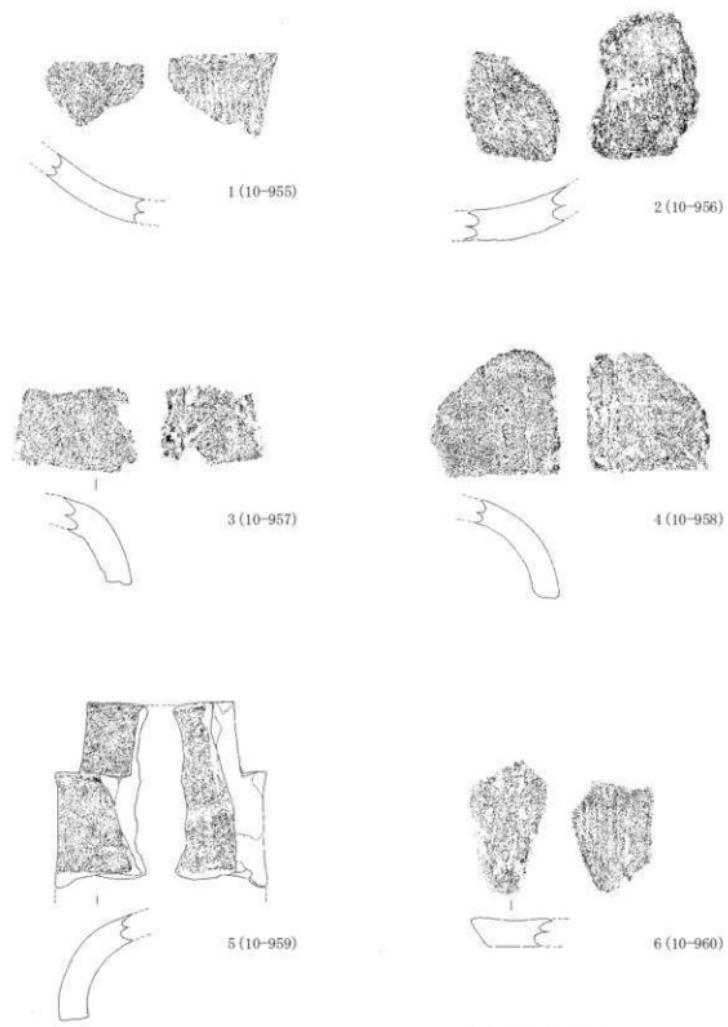
すべて第IV-1 層の出土である。

須恵器（第 28 図 17）：壺底部破片である。底部ヘラ切り後、ナデ調整を施す。

瓦（第 30 図 1～6）：1、2 は平瓦である。1 は、凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が見られる。焼成やや良好で硬質であり、灰白色を呈す。離れの砂が付着する。糸切り痕がある一枚作りである。2 は、凸面は縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕がある。いぶし焼成により黒色を呈し、軟質である。摩耗している。

3、4 は丸瓦である。3 は、凸面は縄目の叩き後、ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕がある。いぶし焼成により黒色を呈し、軟質である。4 は、凸面は縄目の叩き後、ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕が見られる。いぶし焼成により黒色を呈し、軟質である。

5 は有段の丸瓦であり、凸面は縄目叩き後ナデ調整を施す。凹面は布目圧痕が見られる。焼成不良で軟質であり、淡黄色を呈す。6 は熨斗瓦であり、凸面は縄目の圧痕、凹面は布目圧痕が見られる。いぶし焼成により黒色を呈し、軟質である。摩耗している。



1~6 第IV-1層

0 1:4 10cm

第30図 第116次調査地第IV層出土瓦

表3 第116次調査地検出遺構一覧

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SA2580	第6図	IV	古代	SA2581・SX2582・SF2583→	布堀り溝幅1.5m～2.0m、長さ15m以上、深さ70cmの溝跡。北で西に25°振れる。直径約15～20cmの丸太材痕跡。南北方向。
SA2581	第6図	IV	古代	→SA2580	布堀り溝幅50～60cm、長さ7m以上、深さ30cm、北で西に8°振れる。直径約15～20cmの丸太材痕跡。南北方向。
SX2582	第8図	IV	古代	SF2583→ →SA2580	幅1.4m、長さ2.2m、深さ55cm、北で約30°西に振れる。
SF2583	第9図	V	古代	→SA2580・SX2582	基底幅1.3m以上、遺存高45cm。南で約30°東に振れる。南北方向の築地壠。
SX2584	第11図	V	古代	SK2590→	要問2号(1.8+1.6)×桁行2間以上(2.4+2.4+…の東西両側の建物。柱掘り方一辺1.3m～1.5mの歪んだ方形、深さ約20cm。柱痕跡直径10cm。桁行南側柱筋が北で15°西に振れる。
S12585	第13図	V	古代	→S12586	東西2.2m、南北1.8m以上の方形。壁高3cm。東壁が北で東に15°振れる。
S12586	第13図	V	古代	S12585・S12589→ →SX2592	東西5m、南北3.5m以上の方形。壁高20cm。カマドが南北に設置されている。ほぼ真北方向。
S12587	第16図	V	古代	S12588→ →SX2593	東西5m、南北4.3mの方形。壁高2～3cm。ほぼ真北方向。
S12588	第16図	V	古代	→S12587	東西4m、南北1.8m以上の方形。壁高2～3cm。ほぼ真北方向。
S12589	第13図	V	古代	→S12586	南北2m以上、東西0.7m以上の方形。壁高1～2cm。ほぼ真北方向。
SK2590	第19図	V	古代	SK2591→ →SB2584	長軸1.8m、短軸1.6mの歪な円形。深さ20cm。
SK2591	第19図	V	古代	SK2598→ →SK2590	長軸2.5m、短軸1.8mの歪な円形。深さ16cm。
SK2592	第23図	V	古代	S12586→	長軸1.8m、短軸1.5m、深さ不明。不整形。
SX2593	第23図	V	古代	S12587→	長軸1.7m、短軸1.5m以上、深さ10cm。不整形。
SX2594	第23図	V	古代		長軸1.4m以上、短軸30cm以上、深さ45cm。不整形。
SX2595	第23図	V	古代		長軸1.2m以上、短軸80cm。深さ45cm。不整形。
SX2596	第23図	V	古代		長軸1.2m以上、短軸80cm。深さ10cm。
SX2597	第23図	V	古代		長軸2.2m、短軸90cm。深さ不明。不整形。
SX2598	第24図	V	古代	→SK2591	深さ20cm。カマドの袖部。

- 例1 SA0000→
例2 →SA0000
当該遺構がSA0000より新しい
当該遺構がSA0000より古い

表4 第116次調査地出土遺物属性表（1）

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
10-879	第7図1	図版9-1	SA2581埋土		瓦	丸瓦				凸面は綱目叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。黒色。いぶし焼成。
10-880	第10図1	図版9-2	SF2583埋土		瓦	平瓦				凸面は綱目叩き。凹面は布目压痕。灰白色。軟質。燒成不良。
10-881	第10図2	図版9-3	SF2583埋土		瓦	丸瓦				凸面は綱目叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。黒色。いぶし焼成。
10-882	第10図3	図版9-4	SF2583埋土		瓦	丸瓦				凸面は綱目叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。灰白色。軟質。燒成不良。
10-883	第12図1	図版9-5	SK2584埋土		須恵器	台付壺	6, 8			底部破片。底部回転へラ切り後、台取り付け後、ナデ調整。
10-884	第14図1	図版9-6	SI2585埋土		須恵器	壺		8, 4		底部回転へラ切り後、ナデ調整。
10-885	第14図2	図版9-7	SI2585埋土		須恵器	壺	15.3	9.8	6.5	底部回転へラ切り無調整。体外面に模様沈みあり、煤化状況付着。底面外縁に「乞」の墨書き。
10-886	第14図3	図版9-8	SI2585埋土		土師器	小型甕	16.4			口縁部から頸部に多条横肋の段状沈み。体外面に横方向のカキ目。体部外縁に横方向のハケ目。
10-887	第14図4	図版9-9	SI2585埋土		土師器	小型甕	5.6			底部破片。底部外縁に木葉痕。
10-888	第15図1	図版9-10	SI2586埋土		須恵器	壺	14.4			口縁部から体部破片。
10-889	第17図1	図版9-11	SI2587埋土		須恵器	壺		7.2		底部破片。底部回転へラ切り後回転ナデ調整。底部外縁に櫛痕あり。
10-890	第17図2	図版9-12	SI2587埋土		赤褐色土器	壺		5.2		底部破片。底部回転無調整。体部内面に煤化状況付着。
10-891	第17図3	図版9-13	SI2587埋土		赤褐色土器	壺		6.0		底部回転無調整。体部内面に煤化状況付着。
10-892	第17図4	図版9-14	SI2587埋土		赤褐色土器	壺	13.0	5.0	4.9	底部回転無調整。体部内面に煤化状況付着。
10-893	第17図5	図版9-15	SI2587埋土		石製品	金末石				花崗岩。

表5 第116次調査地出土遺物属性表(2)

遺物No.	図番号	写真図版	出土点 層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
10-894	第17図6	図版9-16	SI2587埋土		土製品	トイゴ羽口				破片。
10-895	第17図7	図版9-17	SI2587埋土		鉄製品	鉄鍔				上部及び下部欠損。
10-896	第17図8	図版9-18	SI2587埋土		鉄製品	鉄鍔				刀部先端及び茎部欠損。
10-897	第18図1	図版10-1	SI2588埋土		須恵器	甕				全体破片。外面に平ら叩き痕。内面底部下部同心円状当て具痕。底部平行当て具痕。内面を覗に転用。
10-898	第18図2	図版10-2	SI2588埋土		赤褐色土器	坏	12.2	5.5	4.7	底部回転糸切り無調整。被熱している。
10-899	第18図3	図版10-3	SI2588埋土		赤褐色土器	甕	17.0	9.2	19.4	外側底部上半にカキ目調整、煤付着。内側底部下半に手持てハケグリ調整。内面上半に横方向のハケ目調整。
10-900	第18図4	図版10-4	SI2588埋土		土製品	トイゴ羽口				破片。
10-901	第20図1	図版10-5	SK2590埋土		須恵器	高台付坏				底部破片。底部回転糸切りナデ調整。
10-902	第21図1	図版10-6	SK2590埋土		瓦	平瓦				凸面は縛目の叩き痕。凹面は布目压痕。にぶい黄褐色。燒成や不良。軟質。
10-903	第22図1	図版10-7	SK2591埋土		須恵器	台付坏			10.0	底部回転ヘラ切り。台取り付け後ナデ調整。底部下端ケズり調整。
10-904	第22図2	図版10-8	SK2591埋土		赤褐色土器	坏			5.6	底部破片。底部回転糸切り無調整。被熱している。
10-905	第22図3	図版10-9	SK2591埋土		鉄製品	鉄鍔				下部欠損。
10-906	第25図1	図版11-1	SX2593埋土		赤褐色土器	坏			5.2	底部破片。底部回転糸切り無調整。体部外側に煤状炭化物付着。被熱している。
10-907	第25図2	図版11-2	SX2593埋土		赤褐色土器	坏			5.8	底部破片。底部回転糸切り無調整。内面に煤状炭化物付着。全体に強く被熱している。
10-908	第25図3	図版11-3	SX2593埋土		赤褐色土器	坏			12.8	口縁部破片。口縁部外側に煤状炭化物付着。被熱している。
10-909	第25図4	図版11-4	SX2593埋土		石製品					金末石。花崗岩製。上面露出部分が被熱している。
10-910	第25図5	図版11-5	SX2594埋土		赤褐色土器	坏			6.0	底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-911	第25図6	図版11-6	SX2595埋土		赤褐色土器	坏			12.0	4.4 底部回転糸切り無調整。全体に煤状炭化物付着。被熱している。
10-912	第25図7	図版11-7	SX2595埋土		赤褐色土器	坏			5.4	4.5 底部回転糸切り無調整。体部外側に煤状炭化物付着。灯明显として使用。破片。
10-913	第25図8	図版11-8	SX2595埋土		土製品	トイゴ羽口				底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整。
10-914	第25図9	図版11-9	SX2596埋土		須恵器	坏			13.8	3.2 全体に煤状炭化物付着。被熱している。
10-915	第25図10	図版11-10	SX2598埋土		須恵器	台付坏			15.4	6.5 底部回転ヘラ切り。台取り付け後ナデ調整。
10-916	第25図11	図版11-11	SX2598埋土		土師器	甕			7.0	体部前面に縱方向のカケ目調整。体部内面に横方向のハケ目調整。底部砂底でナデ調整。
10-917	第25図12	図版11-12	SX2598埋土		土師器	甕			15.6	17.0 体部外面に縱方向のカケ目調整。体部内面に横方向のハケ目調整。底部砂底。
10-918	第26図1	図版12-1	SX2598埋土		瓦	平瓦				凸面は縛目の叩き痕。凹面は布目压痕。砂粒多い。にぶい黄褐色。燒成や不良。糸切り痕ある。
10-919	第27図1	図版12-2	I層	MW86～90	須恵器	長頸甕			12.4	口縁部～頸部破片。
10-920	第27図2	図版12-3	I層複乱	MW86～82	須恵器	坏				底部破片。底部回転ヘラ切り後ナデ調整。底部外面に「丸」の墨書き。
10-921	第27図3	図版12-4	I層複乱	MW82	須恵器	坏			9.4	底部破片。底部回転糸切り後外側のみケズり調整。底部内面を研に転用。
10-922	第27図4	図版12-5	I層複乱	MW86	須恵器	坏			10.0	底部破片。底部回転糸切り後全周ケズリ調整。底部内面を研に転用。
10-923	第27図5	図版12-6	I層複乱	MW82	須恵器	坏			12.6	口縁部破片。体部外面に「□(脚カ)酒外」「□」の墨書き。
10-924	第27図6	図版12-7	I層複乱	MW84	須恵器	坏			13.4	8.4 3.0 底部回転ヘラ切り後ナデ調整。被熱している。
10-925	第27図7	図版12-8	I層複乱	MW82	須恵器	坏			12.8	3.3 底部回転ヘラ切り後ナデ調整。
10-926	第27図8	図版12-9	I層複乱	MW86	須恵器	坏			12.8	6.4 3.0 底部外側へラ切り後丁寧なナデ調整。底部内面を研に転用。口縁部に墨痕。
10-927	第27図9	図版12-10	I層複乱	MW82	陶器	施利			5.6	灰釉瓶。体部下部～底部に簡描き文様。
10-928	第27図10	図版12-11	I層複乱	MW84	磁器	碗			3.6	肥前系磁器染付碗。内面見込みに五弁花文。

表6 第116次調査地出土遺物属性表(3)

遺物No.	図番号	写真図版	出土点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-929	第27図11	図版12-12	I 層擾乱	M0~M0 82	石製品	砥石				凝灰岩製。3面使用。
10-930	第27図12	図版12-13	I 層擾乱	M084	石製品	砥石				凝灰岩製。広端部間に穿穴。3面使用。
10-931	第27図13	図版12-14	I 層擾乱	M082	土製品	人型				土人型。
10-932	第27図14	図版12-15	I 層擾乱	M086	鉄製品	鎌				刃部。
10-933	第27図15	図版12-16	I 層擾乱	M086	鉄製品	鉄斧				
10-934	第29図1	図版14-1	I 層表土	M0~MQ 86~90	瓦	平瓦				凸面は網目の叩き痕。凹面は布目压痕。一枚作り。糸切り板と指の痕跡あり。焼成やや不良、軟質。黄褐色。被熱している。
10-935	第29図2	図版14-2	I 層表土	M0~MQ 86~90	瓦	丸瓦				凸面は網目の叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。黒色。いぶし燒成。分割板あり。
10-936	第28図1	図版13-1	II 層	M0~MQ 88~90	須恵器	蓋				リン片状つまみ。天井部外側ケズリ調整。内面を硯に転用。
10-937	第28図2	図版13-2	II 層	M0~MQ 81~85	赤褐色土器	壺		7.0		底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-938	第28図3	図版13-3	II 層	M0~MQ 88~90	赤褐色土器	壺	14.2	5.4	5.5	底部回転糸切り無調整。被熱している。
10-939	第28図4	図版13-4	II 层	M086	赤褐色土器	甕	14.4	7.6	10.9	小型甕。底部回転糸切り無調整。
10-940	第28図5	図版13-5	II 层	M0~MQ 81~85	陶器	碗				肥前系陶器。灰釉碗。口縁部から体部破片。
10-941	第28図6	図版13-6	II 层	M0~MQ 81~85	陶器	皿		7.2		肥前系陶器。体部内面鉄錆。煤状化現象が多量付着。土瓶形須恵。外面は鉄錆地になまこ釉重ね焼けしている。
10-942	第28図7	図版13-7	II 层	M0~MQ 88~90	陶器	蓋		6.0		土瓶形須恵。外面は鉄錆地になまこ釉重ね焼けしている。
10-943	第28図8	図版13-8	II 层	M0~MQ 81~85	磁器	壺	6.8	2.5	2.7	白磁小壺。口縁部輪花の型打ち成型。
10-944	第28図9	図版13-9	II 层	M0~MQ 81~85	磁器	皿		9.6		染付。内面に型紙刷りの模様染付。
10-945	第28図10	図版13-10	II 层	M0~MQ 88~90	鉄製品	鎌				刀部と茎部欠損。
10-946	第29図3	図版14-3	II 层	M0~MQ 81~85	瓦	平瓦				凸面は網目の叩き後ナデとハケ目調整。凹面は布目压痕。黒色。いぶし焼成。
10-947	第29図4	図版14-4	II 层	M0~MQ 86~90	瓦	丸瓦				凸面は網目叩き後いねいなナデ調整。凹面は布目压痕。灰～黒色。焼成良好。やや軟質。
10-948	第28図11	図版13-11	III-1層	MN87	須恵器	壺		11.4		体部破片。体部外面に煤状化現象が若干付着。被熱している。
10-949	第28図12	図版13-12	III-1層	MN87	土師器	甕		20.0		口縁部破片。口縁から頸部にかけて縱方向に二ヶ目調整後ナデ調整を施す。体部は微調整。口縁部の内面横方向にハケ目調査後ナデ調査。
10-950	第28図13	図版13-13	III-1層	M087	赤褐色土器	壺			4.0	底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-951	第28図14	図版13-14	III-1層	M087	赤褐色土器	壺		12.6		口縁～体部破片。体部外面上に煤状化現象付着。被熱している。
10-952	第28図15	図版13-15	III-1層	M087	赤褐色土器	皿			5.4	底部破片。底部回転糸切り無調整。
10-953	第28図16	図版13-16	III-1層	M087	石製品	砥石				砥石。上部に穿穴あり。凝灰岩製。
10-954	第28図17	図版13-17	IV-1層	M090	須恵器	壺		6.0		底部破片。底部へラフ化ナデ調整。
10-955	第30図1	図版14-5	IV-1層	M0~MQ 88~89	瓦	平瓦				凸面は網目の叩き痕。凹面は布目压痕。焼成やや良好。硬質。織れの跡付着。糸切り痕あり。一枚作り。
10-956	第30図2	図版14-6	IV-1層	M0~MQ 88~89	瓦	平瓦				凸面は網目の叩き痕。凹面は布目压痕。いぶし焼成。磨耗している。
10-957	第30図3	図版15-1	IV-1層	MPS8	瓦	丸瓦				凸面は網目の叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。黒色。いぶし焼成。
10-958	第30図4	図版15-2	IV-1層	MPS8	瓦	丸瓦				凸面はナデ調整。凹面は布目压痕。黒色。いぶし焼成。
10-959	第30図5	図版15-3	IV-1層	M0~MQ 88~89	瓦	丸瓦				凸面は網目叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。淡黄色。硬質。焼成不良。
10-960	第30図6	図版15-4	IV-1層	M0~MQ 88~89	瓦	賀斗瓦				凸面は網目压痕。凹面は布目压痕。黒色。いぶし焼成。摩耗している。

III 考 察

第116次調査地は焼山地区南西部、外郭線南西コーナー部にあたり、周辺調査では外郭西辺区画施設である奈良時代の築地跡や、平安時代の材木跡等が検出されている。これらは丘陵の西端に沿うように巡っており、今次調査地の西側はそれら区画施設の南西コーナー部と推定された。また、城内側の調査地東隣接地では、9世紀第2四半期～第4四半期に機能した区画施設で囲まれた城内施設が検出されており、区画施設内からは、焼土面を伴う小規模な工房と考えられる堅穴建物跡や、複数の焼土面などが検出され、鉄製品や鉄滓、フイゴ羽口が出土することから、鉄製品生産に関わる施設としての性格・機能が把握されている。今次調査は、外郭区画施設の位置関係や変遷を明らかにし、城内側の生産施設の広がりを含めた利用状況を把握することを目的に調査を実施した。

調査の結果、調査地は近世以降の歴史跡や近現代の擾乱跡が多数検出され、古代の遺構面が大きく削平を受けている状況を確認した。西側においては、外郭区画施設を構成すると考えられる遺構が、城内側となる東側においては、鉄製品の生産に関わる鍛冶工房と考えられる堅穴状建物跡や焼土面などの遺構が検出された。全体として、掘立柱建物1棟、材木跡2条、築地跡1条、堅穴建物跡5軒、土坑2基、焼土遺構7基、柱掘り方形状遺構1基を検出した。

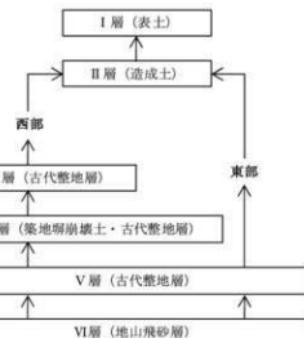
これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用状況とその変遷について以下にまとめる。

1 各遺物包含層の年代について

層序に従い、各層出土の年代比定資料をみていくと、第I層・第II層からは現代のガラスなどが出土している。調査地周辺は、近年まで宅地として利用されていた場所であることから、それらに関わる近現代の造成土であると考えられる。II層からは18世紀に位置づけられる肥前IV期の肥前系磁器染付碗（第28図8）が出土しており（註1、以下、遺物の年代比定における「～に位置づけられる」の表記は、「～の」と表記する）、また、第III層面から歴史的遺構の掘り込み下部が検出されている。これらのことから、II層によって削平されてしまっているが、近世以降に、畠地として利用されていた時期があったと考えられる。

古代の遺物包含層と考えられる第III層については、第III-1層から、底形が縮小した赤褐色土器壺A（第28図13）が出土している（註2）。出土遺物の年代をふまえると、10世紀以降に造成された整地層であると考えられる。第III-2層からは年代を比定する遺物は出土していないが、第III-1層の年代や後述する下層整地層の年代や区画施設との関係から、9世紀第4四半期以降の整地層であると考えられる。

第IV層については、調査地西側にのみ堆積し



第31図 第116次調査地層序堆積関係図

ており、第IV-1層・第IV-2層とともに、瓦を多く含有している。このうち、第IV-2層からは凸面に砂粒が多く灰色～暗灰色を呈する2群瓦（第30図1）、黒色（いぶし焼成）を呈する1-3群瓦（第30図3・4）が出土している。1-3群瓦は創建期である8世紀前半の年代が与えられ、いずれも摩耗が著しく、経年劣化している。2群瓦は8世紀後半の年代が与えられる（註3）。また、第IV-2層からは築地塙壌土由來の黄褐色粘土と瓦が寄り多く含まれていることから、築地塙跡崩壌土層と考えられる。第IV-1層からは、9世紀第1四半期の須恵器坏（第28図17）が出土していることから、SF2583 築地塙廐絶後、SA2581 材木塙跡の外郭区画施設を構築するために整地された外郭III期の整地層であると考えられる（表7）。9世紀後半の外郭IV期に該当する整地層は明確ではないが、南西隅部で外郭区画施設 SF2583 築地塙跡および築地塙崩壌土を覆う、硬くしまった整地層であるIII-2層が外郭IV期の整地であると考えられる。

第V層からは、年代を比定する遺物は出土していないが、遺物がほとんど出土しないことをふまえると8世紀前半の創建期整地層と考えられる。

2 各遺構の年代について

調査地西側、第IV層の整地層が堆積する範囲から検出された遺構は、主に区画施設を構成するものとなっている。SA2580・SA2581 材木塙跡からは年代を比定する遺物は出土していないが、前述の第IV層の年代から、外郭III期の8世紀末・9世紀初め以降に構築された遺構と考えられる。SA2581は重複関係からSA2580より古く、柱列塙の構造であることをふまえると、8世紀末から9世紀初めの外郭III期の区画施設であると考えられる。また重複関係から、SA2580はSA2581より新しく、材木列塙の構造であることもふまると、9世紀第4四半期の外郭IV期の区画施設と考えられる。SX2582 柱塙方状遺構については、年代を比定する遺物は出土していないが、SF2583 築地塙跡よりは新しく、SA2580 材木塙跡よりは古いことから、外郭III期のSA2581 材木塙跡と大きく差の無い時期に掘り込まれ、何らかの施設が構築されたものと考えられる。

第IV層下より検出されたSF2583 築地塙跡は第V層面に構築されており、積土に隣接する本体の崩壌土に黒色（いぶし）で経年劣化した1-3群瓦（第10図2）が混入し、また、3-1群の有段丸瓦（第10図3）も出土していることから、外郭I期に構築され、外郭II期まで存続していたと考えられる。

調査地の中央から東側にかけて検出された古代の遺構は、いずれも第V層面検出であるが、第V層が創建期に遡る可能性がある整地であることや、後世の削平の影響が大きいことをふまると、後世の削平により失われた上位層から掘りこまれていた可能性が高い。SR2584 捜立柱建物跡の埋土からはヘラ切り後、ナデ調整が施された9世紀第1四半期の須恵器台付坏（第12図1）が出土しているが、後述する重複関係においてより古いSK2590 土坑の年代観から9世紀第3四半期以降の遺構と考えられる。

SI2585 壓穴建物跡の埋土からは、8世紀第4四半期のヘラ切り後ナデ調整を施した須恵器坏（第14図1）が出土している。その他に8世紀第3四半期の土師器甕や須恵器坏（第14図2・3）が出土していることから、8世紀後半の遺構と考えられ、後述する他の壓穴建物跡とは利用時期に差があると考えられる。SI2586 壓穴建物跡からは年代を比定する遺物が出土していないが、SI2585より新しく、SI2588と同方位であることから、9世紀第3四半期以降の遺構であると考えられる。SI2587 壓穴建物跡の埋土からは9世紀第4四半期の被熱した赤褐色土器坏A（第17図4）や、9世紀第4四半期の底形が縮小した赤褐色土器坏A（第17図2）が出土している。またSI2588 壓穴建物跡からは、9世紀第3四半期の

表7 秋田城遺構変遷表

	733	750 760	800	830	850	878	900	915	950
政庁	I期	II期	III期	IV/A期	IVB期	V期	VI期		
政庁区画施設	築地塀 材木列塀		一本柱列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	材木列塀	一本柱列塀		
外郭	I期	II期		III期 (小期あり)		IV期 (小期あり)		V期	
外郭区画施設	瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀		柱列塀		材木列塀		大構	
大畠地区	I期	II期 生産施設	III期 生産施設整備	IV期 生産施設充実 居住域住居数増加		V期			
焼山地区	I期 A類建物 A類建物倉庫	II期 B類建物 B類建物倉庫か?		III期 (小期あり) C類建物 C類建物倉庫群		D類建物?			
鶴ノ木地区	I期	II期	III期	IV期		V期			
外郭西門	I期	II期	III期	IV期		V期		VI期	
時期	天平6年(733)～	8C後半前葉～	8C末・9C初 ～	9C第2四半期 ～	9C第3四半期～	元慶2年(878)	10C第2四半期 ～10C中葉		
備考	秋田出羽柵創建期	天平宝字年間 「秋田城」 改修期	第III期全体 大改修期	天長7年 (860) 大地震後 復興期	元慶の乱で 焼失	元慶の乱 (878)後 復興期		最終末期	

赤褐色土器壺A（第18図2）が出土している。切り合い関係はSI2588 竪穴建物跡が古く、SI2587 竪穴建物跡が新しくなっている。これらのことから、9世紀第3四半期から第4四半期にかけて利用されていた遺構であると考えられる。SI2589 竪穴建物跡からは年代を比定する遺物は出土していないが、位置関係や方位から、SI2586と同時期の遺構と考えられ、SI2586の構築に伴い廃絶したと考えられる。

SK2590・SK2591 土坑は、SK2590 土坑から9世紀第2四半期の糸切り後ナデ調整を施した須恵器台付壺（第20図1）が、SK2591 土坑から第9世紀第3四半期以降の赤褐色土器壺A（第22図2）が出土していることや、SB2584との重複関係から、第9世紀第2四半期以降に掘りこまれた廃棄土坑であると考えられる。

SX2596 焼土遺構については、9世紀第2四半期の須恵器壺が出土しており、9世紀第2四半期以降と考えられ、隣接するSX2597も形状や想定される機能から同時期の遺構であると考えられる。SX2592 焼土遺構は年代比定資料が出土していないが、SI2586との重複関係から、9世紀第3四半期以降の遺構であると考えられる。SX2593～SX2595 焼土遺構からは9世紀第4四半期の底部が縮小した赤褐色土器壺A（第25図1～3・5～7）が出土していることから、9世紀第4四半期以降の遺構であると考えられる。これらのことから、SX2592～2597 焼土遺構は9世紀第2四半期～9世紀第4四半期の間に操業していた、鉄生産・加工関連施設の炉跡であると考えられる。

SX2598 カマド状遺構からは、8世紀第4四半期のヘラ切りで台取り付け後ナデ調整を施した須恵器台付壺（第25図10）が出土していることや切り合い関係から、8世紀第4四半期以降に短期的に営まれた竪穴建物跡の一部であったと考えられる。

調査地中央から東側の検出遺構で検出面の関係については、第V層面から、8世紀第3四半期から9世紀第4四半期にかけての遺構が検出されている。第V層面検出遺構においては出土遺物の年代に幅が

あり、時期差が存在することから、一部の遺構は上層の整地層において掘りこまれていたと考えられる。第V層整地以前に8世紀第3四半期以降の利用に伴う整地層が存在していたが、後世の削平によって失われてしまったため、これらの遺構の下部が残る形で第V層面において検出されたと考えられる。

以上のことから各遺構の年代は前述の各整地層の年代と、前後関係も含め矛盾しない。

3 第116次調査地全体の利用状況と変遷について（第32図）

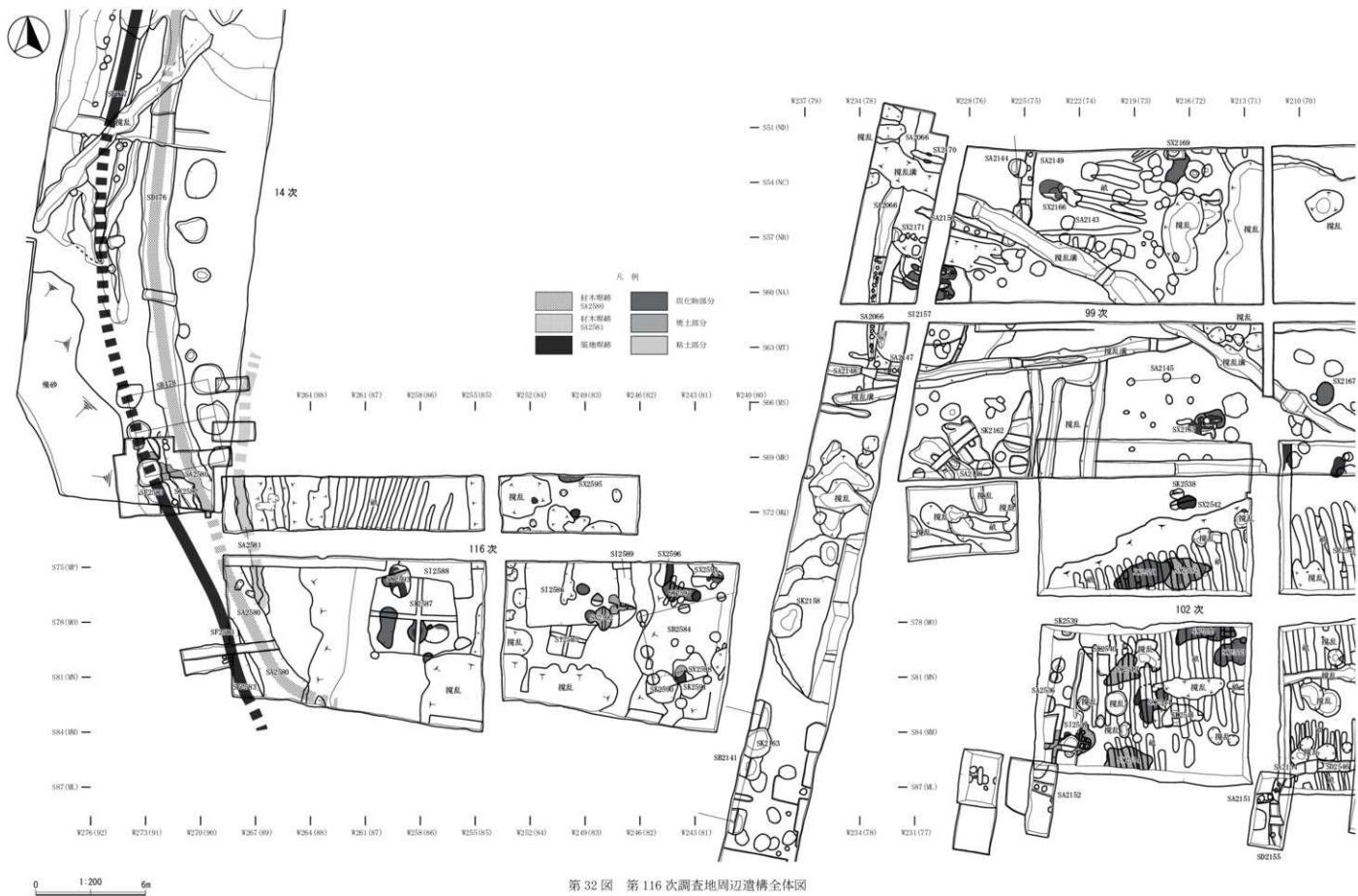
第116次調査において検出された遺構について、以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると表8のようになる（表8）。先述した年代を元に構成を整理し、秋田城遺構変遷を踏まえつつ調査地の古代における利用状況を検討していく。

（1）外郭南西部における外郭区画施設について

今次調査では、外郭南西部の外郭区画施設として築地跡と材木堆跡2条が検出された。前述した検出層位の重複関係から、SF2583 築地跡は外郭I・II期築地塀、SA2581 材木堆跡は外郭III期材木塀、SA2580 材木堆跡は外郭IV期材木塀に該当し、変遷することが把握された。今次の調査で検出されたSF2583 築地跡は、位置関係や先述した年代観から、外郭西側で検出されていた築地跡と連続すると考えられる。SF2583 築地跡は南北方向に、南でやや東に振れる形で、直線的に斜行し、現況は削平により崖となっている調査区外の南側に伸びていることが明らかになった。SF2583 築地跡の構造上の特

表8 第116次調査地遺構変遷表

層序	V層	IV-2層	IV-1層	III-2層	III-1層	II層	I層
時期区分	創建期 8世紀 第3～4四半期		9世紀 第1～3四半期	9世紀 第4四半期	10世紀 第1四半期	近世 以降	現代
西側 検出遺構	(外郭区画施設) SF2583		SX2582 → SA2581 → SA2580				
層序	V層			III層		II層	I層
時期区分	創建期 8世紀 第3～4四半期		9世紀 第2～3四半期	9世紀 第4四半期	10世紀 第1四半期	近世 以降	現代
東側 検出遺構		SX2598 → SI2585 → SI2589 → SI2588 → SX2594 → SX2595 → SX2596 → SX2597	SK2590 → SI2584 → SK2591 → SI2586 → SX2592 SI2589 → SI2587 → SX2593 SI2588 SX2594 SX2595 SX2596 SX2597				



第32図 第116次調査地周辺遺構全体図

徴は、基底部下に構築地盤を安定させるためと考えられる基壇状の整地がなされていることである。このSF2583 築地塀の基底部にズレを防ぐためと考えられる瓦片敷きが行われていることや、西側の斜面側に崩壊した形跡がある状況等をふまると、外郭南西隅部は、西側が急斜面であったことが想定される。外郭南西隅部は急斜面上の丘陵の際に城壁が設置されていたと予想され、当時の景観を復元する知見を得ることが出来た。

SA2581 材木塀跡は SF2583 築地塀跡より城内側に位置しており、先述のとおり、外郭Ⅲ期の区画施設と考えられ、築地塀が廃絶した後、大規模な整地が行われ、そこに新しく構築された区画施設であると考えられる。過年次調査では材木塀跡であると想定されていた SD176 溝跡が、今回の調査で検出された外郭Ⅳ期区画施設である SA2580 材木塀跡と連続することと、丸太材の痕跡が検出され材木列塀跡であることが把握された（註4）。区画施設の方向と屈曲するコーナー部については、SA2580 材木塀跡は調査地南端でさらに東に屈曲する状況が把握された。SF2583 築地塀跡と SA2581 材木塀跡については、調査区内では屈曲箇所が把握されず、外郭区画施設のコーナー部に設置される事例が多い櫓状建物も検出されないことから、さらに南の調査区外で東側へ屈曲するものと考えられる。

（2）城内生産施設について

区画施設が検出された調査地西側に対し、調査地東側は大きく現代の擾乱を受けており、全く異なる様相を呈している。調査地中央から東側にかけては、堅穴建物跡ならびに粘土面に焼土や炭化物面を伴う炉跡と考えられる焼土遺構が多数検出されている。焼土遺構類はくぼみを掘り込み、粘土を敷き、その上で火を使う作業をしていた生産に関連する遺構であったと考えられる。堅穴建物跡はいずれも遺存状態が悪いが、鉄滓類が検出されていることや、焼土面や炉跡を伴うことをふまえると、年代的に古い SI2585 堅穴建物跡を除き、住居としての機能ではなく工房的な性格をもっていたことが考えられる。これらの堅穴建物跡や焼土遺構については、遺構内や調査地内からフイゴ羽口、鉄滓や鉄製品の一部が出土している状況もふまると東側の過年度調査地と同様に鍛冶などの鉄製品生産・加工に関係する生産施設としての性格を持つと考えられる。なお、焼土遺構については、いずれも楕円系もしくは不整形のプランを持ち、特に粘土によって構築されているものに関しては周辺調査で検出されているものも含め、一定の規格性がうかがえる（註5・6・7）。

これらのことから、9世紀代に東側の区画施設を伴う生産施設の西側、西辺外郭区画施設に接した範囲まで、生産施設が広がっていたことが明らかになった。今次調査地で検出された遺構に関しては、後世の削平の影響が大きく遺存状況が悪いが、そのことを勘案しても小規模な遺構であるものが多い。出土している鍛冶に関連すると見られる遺物もサイズが小さく、同じく鍛冶関連遺構が確認された大畠地区の城内東大路周辺の調査地と比べると鉄滓の量も少ない。これらのことから、今次調査地周辺で検出されている生産に関わる遺構は、鉄製品の大規模な生産等を行なうのではなく、二次加工を行っていた可能性が考えられる（註6）。

4 第116次調査の成果と課題

以上、第116次調査の結果により、今次調査地は西側においては、外郭Ⅰ期～Ⅳ期までの外郭区画施設の変遷と位置関係、南西コーナー部の状況を把握することが出来た。築地塀は丘陵の際に沿うよう造成されていたことを改めて確認し、城外からの景観、視覚的効果を意識した構造になっていたと考えら

れる。外郭Ⅰ期～Ⅲ期区画施設のコーナー部については調査地外で削平されている可能性が高く、今後外郭南辺との位置関係から推察していく必要がある。

調査地の中央から東側においては、8世紀第3四半期から居住域として利用された状況と、9世紀第2四半期から第4四半期にかけて営まれた鉄製品生産に関連する生産施設が把握された。検出遺構の構成や時期は、東側の調査成果とほぼ同様となっており、生産施設の広がりと当該時期の焼山地区南西部の利用状況がより明確に把握されたといえる。

註1 これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は下記に基づき記述する。

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年・九州近世陶磁学会10周年記念』

註2 これ以降の考察における古代出土土器の年代比定は、以下の秋田城跡出土土器編年成果に基づき記述する。

小松正夫 1992 「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）—第54次調査の木簡・漆紙文書伴出器を中心にして—」『第18回古代旅籠官衙遺跡検討会資料』pp. 139-144

伊藤武士 1997 「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7 pp. 32-44

小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997 「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会 1997年度秋田大会報告・律令国家・日本海—シンポジウムII・資料集一』pp. 18-30

秋田市 2001 「第7章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 史料編』pp. 383-390

秋田市教育委員会 2007 「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡II—鶴ノ木地区—』pp. 340-345

神田和彦 2010 「ケズリのある赤い壺—古代秋田郡域の赤褐色土器壺B—」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp. 187-210

註3 秋田市教育委員会 2009 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報 2008』

出土瓦については表9に基づき分類した。

表9 秋田城出土瓦の分類

分類	組分	色調	焼成	質	備考	時期区分	年代
1群	1-1群	灰白	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政庁Ⅰ期 (外郭Ⅰ期)	8世紀 第2四半期
	1-2群	灰色					
	1-3群	黒色（いぶし焼成）					
2群		青灰・灰・暗灰	良好・堅緻	硬質	・砂粒が多い ・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か	政庁Ⅱ期 (外郭Ⅱ期)	8世紀後半
3群	3-1群	暗灰～灰	良好・堅緻	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城廻窯跡産か	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	3-2群	灰・灰黄・黄灰					
4群	4-1群	橙色系を主体	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	4-2群	黄色・ にぶい黄灰～褐色					

※秋田市教育委員会2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

註4 秋田市教育委員会 1975 『秋田城跡 昭和49年秋田城跡発掘調査概報』

註5 秋田市教育委員会 2012 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報 2011』

註6 秋田市教育委員会 2018 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報 2016』

註7 秋田市教育委員会 2020 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報 2019』

註8 秋田市教育委員会 2006 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報 2005』

IV 秋田城跡環境整備事業

令和3年度の整備

今年度も昨年同様、これまで整備を進めてきた外郭東門地区や政府地区、水洗廻舎を復元した鶴ノ木地区を面的に結ぶため、平成22年度から実施している城内東大路の復元を行った。また、明治時代の道路(現市道)開削により分断されている西側史跡公園と歴史資料館を結び、一体化を図るとともに遺跡表示を行う史跡公園連絡橋建設整備工事を実施した。工事は令和2年度から同3年度にかけての継続工事として実施した。

環境整備工事の概要は以下のとおりである。

1 城内東大路整備	実施地区	大畠地区
	整備面積	248 m ²

工種	細目	数量	金額(千円)	備考
敷地造成工	盛土工	1式	520	山砂盛土
	法面工	1式	171	機械築立整形、人工芝張芝
道路舗装工	大路表示舗装工	1式	1,026	透水性舗装(A=12.5m ²)
	歩道カラーブラック工	1式	419	塗布式(A=50.6m ²)
施設整備工	遺構説明板設置工	1式	2,005	W= 960mm H=1,850mm
	転落防止柵設置工	1式	2,052	L=12,600mm H= 850mm
雑工	雑工	1式	267	支障木伐採等
仮設工	工事用道路	1式	85	敷砂利工
工事費計			6,545	



城内東大路完成（東から）



施設整備完成（南から）

2 史跡公園連絡橋整備 実施地区 大畠地区・焼山地区
整備面積 1937 m²(令和2～3年度分)

秋田城跡史跡公園連絡橋整備工事区分

工事名	工事内容	工期
下部工	橋台2基基礎工事・軸体工工事、デッキ基礎工事、土留めパネル設置	令和2年6月29日～令和3年5月31日
上部工	橋梁工事、東側デッキ製作設置、西側盛土補強 広場・園路造成	令和2年12月23日～令和3年10月29日
遺構表示工	政庁・城内西大路遭構表示工事、高欄・防護柵設置、舗装、融雪設備工事、照明設備工事	令和3年2月19日～令和4年3月18日

令和3年度工事内容

工事名	細目	数量	金額(千円)	備考
下部工	橋梁下部工	1式	26,004	デッキ基礎H鋼4本打設、土留めパネル18枚設置
上部工	鋼橋上部工	1式	165,206	鋼橋架設18.6m、東側デッキ製作設置、西側広場造成(補強土壁301m ²)、園路造成
遺構表示工	遺跡表示工	1式	104,427	植栽、電気・融雪設備、舗装、遺構表示制作設置、高欄・防護柵製作設置
工事費計			295,637	



連絡橋から政庁（西側広場から）



連絡橋から西側広場（東側アッキから）



連絡橋全景および多目的広場（南西から）

V 秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、令和3年度は下記の事業を実施し、全体で3,058名の参加者があった。

1 発掘体験教室（中止）

小中学校を対象に地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大をふまえ中止とした。

2 第116次発掘調査現地説明会（7月31日）

令和3年度に寺内焼山地区で行われた第116次発掘調査の成果を公開した。参加者54名。

3 史跡秋田城跡パネル展（7月31日～8月29日・秋田市ポートタワーセリオン、9月11日～9月26日・秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、11月26日～12月10日・秋田市役所1階市民ホール）

市内の観光施設等の展示会場3箇所で、一般市民を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布した。令和3年度のテーマは「秋田城の政庁と連絡橋整備一失われた政庁の再現ー」を行った。見学者は、ポートタワーセリオン378名、民俗芸能伝承館372名、秋田市役所1階市民ホール735名。

4 史跡探訪会（9月18日）

市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者10名。

5 東門ふれあいデー（中止）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大をふまえ中止とした。

6 史跡めぐり（10月3日）

秋田城周辺を文化財や伝承などについて講師の解説を聞きながら歩いてもらい、史跡公園以外の史跡指定地域の魅力を伝えることを目的として開催した。参加者15名。

7 史跡散策会（10月16日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。参加者20名。

8 学習講座（前期：中止、後期2月3日・4日）

秋田城跡全般について発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう講座を開催した。秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねる。前期については新型コロナウイルス感染拡大により開催を見送った。参加者は後期9名。

9 出前講座（随時）

秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用い解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として歴史資料館職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数合計137名。

10 歴史資料館企画展（前期7月22日～8月29日、後期12月18日～1月30日）

秋田城跡や周辺遺跡から出土した資料から、古代の秋田について興味や関心を深めてもらうことを目的として開催した。テーマはそれぞれ、前期「天変地異・疫病と秋田城一橋」への祈りー、後期「秋田城の政庁ー最北の「コの字」ー」を行った。見学者は前期970名、後期328名。また、3月12日に後期企画展に関連するテーマの講演会を行った。参加者30名。



2 現地説明会



3 パネル展



4 史跡探訪会



6 史跡めぐり



7 史跡散策会



8 学習講座



10 企画展 (前期)



10 企画展 (後期)

VI 秋田城跡現状変更

秋田城跡歴史資料館では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすとともに、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、現状変更の必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田市教育委員会が窓口となって申請者および関係機関と史跡保護のための協議を慎重に行い、史跡への影響がない範囲で最小限の対応を行っている。

令和3年の現状変更申請は18件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

- ① 民間工事13件…住宅解体・新築等（2・3・7・11・13・14・15・16）、電柱等工事（6）、ガス管取替工事（8）、カーポート設置（4）、柵工事（9）、桜植樹（10）
- ② 公共工事1件…立入防護柵設置（5）
- ③ 史跡の保護や保存に係わるもの3件…発掘調査（1）、環境整備（12）、史跡公園連絡橋整備（17）

表 10 現状変更一覧

順番	申請者	申請地住所（地番）	変更内容	申請日	許可年月日・番号	対応
1	秋田市長	秋田市寺内焼山8番	発掘調査	令和3年2月12日	令和3年3月19日 2文庁第1913号	発掘調査
2	個人	将軍野南一丁目212番7	住宅解体	令和3年2月18日	令和3年2月19日 秋市教指令第7号	立会調査
3	個人	寺内焼山7番16	住宅解体	令和3年3月19日	令和3年3月24日 秋市教指令第18号	立会調査
4	個人	寺内焼山42	カーポート設置	令和3年4月7日	令和3年5月21日 3文庁第215号	立会調査
5	秋田市上下水道事業管理者	寺内焼山51	立入防止柵設置	令和3年4月14日	令和3年4月15日 秋市教指令第285号	立会調査
6	東日本電信電話株式会社	寺内高野105番9	電柱地支線取替工事	令和3年4月19日	令和3年4月21日 秋市教指令第286号	立会調査
7	個人	寺内焼山78	住宅新築	令和3年5月17日	令和3年5月19日 秋市教指令第294号	立会調査
8	東部ガス株式会社	寺内焼山7番16	埋設ガス管取替	令和3年6月11日	令和3年6月15日 秋市教指令第297号	立会調査
9	個人	寺内高野105番1・105番9	柵工事	令和3年6月14日	令和3年6月15日 秋市教指令第298号	立会調査
10	秋田港ロータリークラブ	寺内大字07番5、114番5 寺内焼山11番1	桜植樹	令和3年7月9日	令和3年8月23日 3文庁第905号	立会調査
11	個人	将軍野南一丁目178番15	住宅解体	令和3年7月13日	令和3年7月15日 秋市教指令第307号	立会調査
12	秋田市長	寺内大字113番2、114番2、5、166番、159番1地内	環境整備	令和3年7月19日	令和3年8月23日 3文庁第905号	立会調査
13	個人	将軍野南一丁目162番7	住宅新築	令和3年7月21日	令和3年9月9日 3文庁第1085号	立会調査
14	個人	将軍野南一丁目178番15	住宅新築	令和3年8月3日	令和3年8月4日 秋市教指令第311号	立会調査
15	個人	将軍野寺内高野162番2	住宅解体	令和3年9月17日	令和3年9月21日 秋市教指令第320号	立会調査
16	個人	寺内大字1番18	建物解体	令和3年9月27日	令和3年9月27日 秋市教指令第326号	立会調査
17	秋田市長	寺内大字07番5地内、67番6地内 寺内焼山1番地内、75番1地内 寺内焼山11番1地内、71番2地内 71番3地内、74番1、74番2、75番、76番	史跡公園連絡橋整備に伴う 関連追加工事	令和3年12月15日	令和3年12月16日 秋市教指令第350号	立会調査



①第116次調査地第IV層—第V層面全景（東から）



②第116次調査地第IV層—第V層面全景（北から）



①第116次調査地西側第IV層ー第V層面遺構掘り下げ状況（北から）



②SF2583 築地跡断ち割り状況（南から）



①調査前状況（東から）



②表土・造成土除去後状況
(東から)



③調査地南東側検出状況
(北から)



① SA2580 材木跡検出状況（北から）



② SA2581 材木跡検出状況（南から）



③ SA2580 材木跡掘り下げ状況（南から）



④ SA2581 材木跡掘り下げ状況（北から）



⑤ SX2582 柱掘り方状遺構掘り下げ状況（東から）



⑥ SX2582 柱掘り方状遺構掘り下げ状況（東から）



① SF2583 築地跡断ち割り状況（南西から）



② SF2583 築地跡断ち割り状況（南東から）



③ SF2583 築地跡断ち割り状況（南から）



④ 拡張区①
SF2583 築地跡断ち割り状況（北から）



⑤ 拡張区①
SX2582 柱掘り方状遺構・SF2583 築地跡断ち割り状況（北から）

図版5



① SB2584 挖立柱建物跡半裁状況（東から）



② SI2585・SI2586 壁穴建物跡掘り下げ状況（北から）



① SI2586 壊穴建物跡カマド半裁状況（南から）



② SI2589 壊穴建物跡検出状況（東から）



③ SI2587 壊穴建物跡・SX2593 焼土遺構掘り下げ状況（北から）



④ SI2587 壊穴建物跡・SX2593 焼土遺構検出状況（西から）



⑤ SI2588 壊穴建物跡検出状況（北から）



① SK2590 土坑半裁状況（南から）



② SK2591 土坑半裁状況（北から）



③ SX2592 焼土遺構検出状況（北から）



④ SX2594 焼土遺構検出状況（南から）



⑤ SX2595 焼土遺構検出状況（南から）



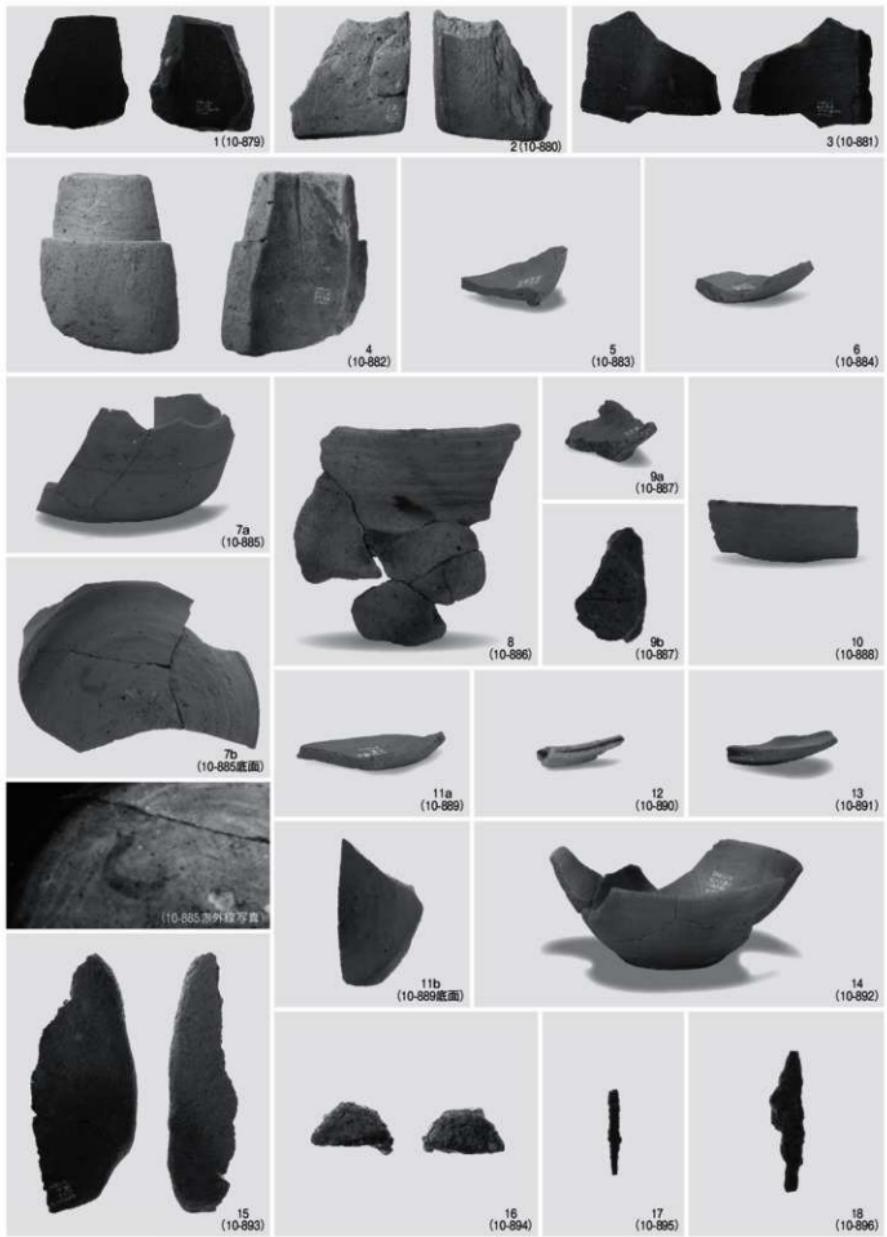
⑥ SX2596 焼土遺構半裁状況（西から）



⑦ SX2597 焼土遺構検出状況（西から）



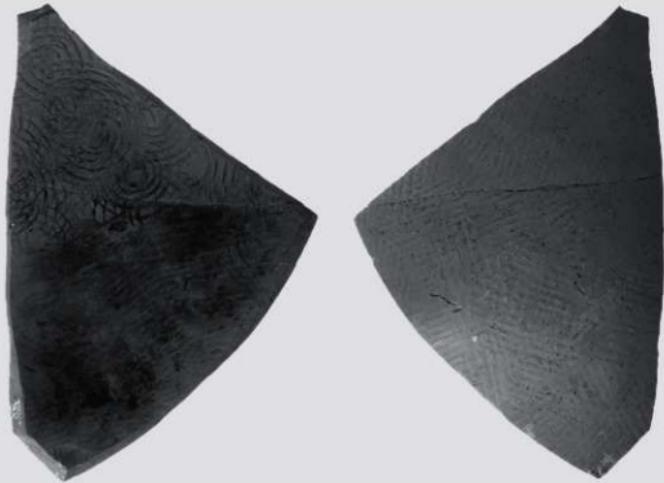
⑧ SX2598 カマド状遺構半裁状況（東から）



1 SA2581、2~4 SF2583、5 SB2584、6~9 SI2585、10 SI2586、11~18 SI2587 (1~4はS=1/4)

第116次調査地出土遺物（遺構内）

図版9



1
(10-897)



2
(10-898)



4
(10-900)



5
(10-901)



3
(10-899)



6
(10-902)



7
(10-903)



8
(10-904)

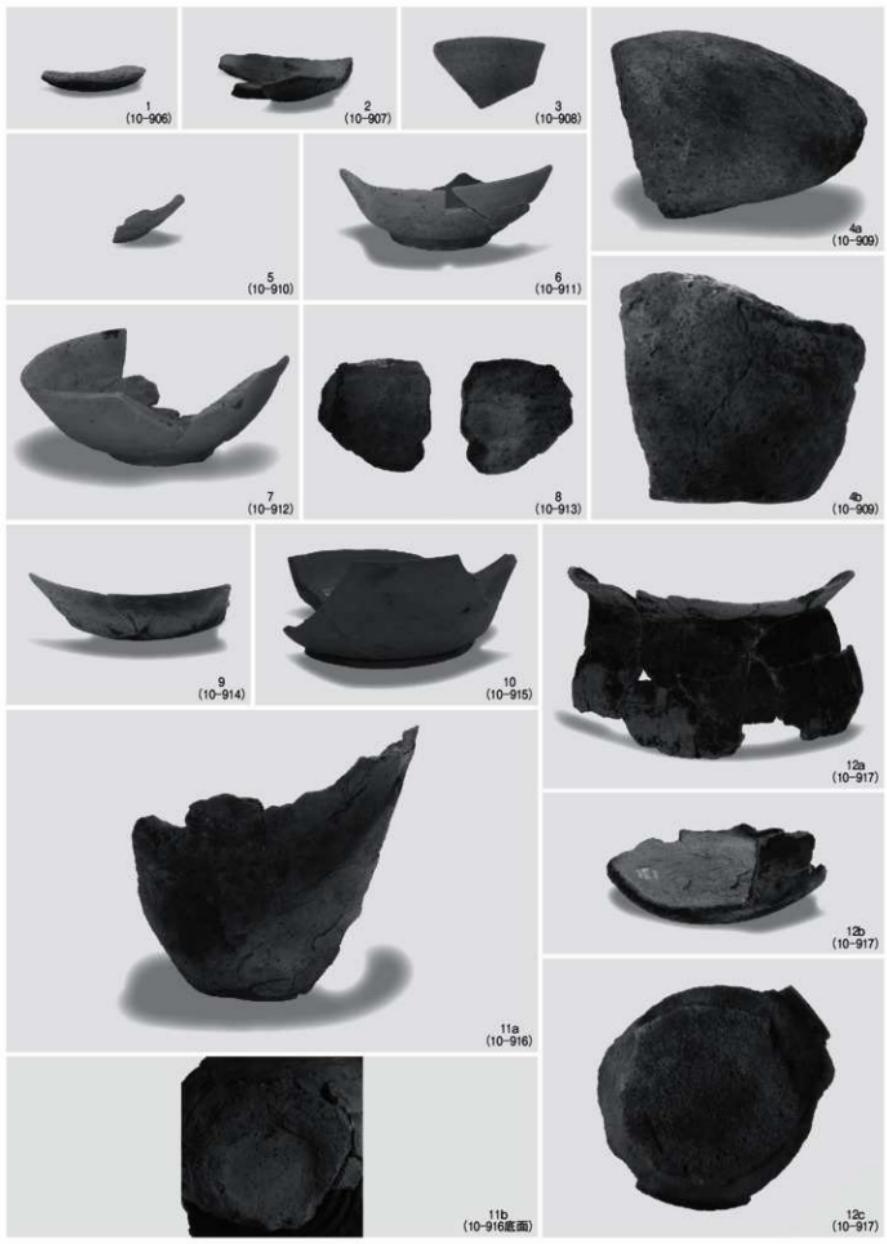


9
(10-905)

1~4 SI2588、5・6 SK2590、7~9 SK2591 (6はS=1/4)

図版10

第116次調査地出土遺物（遺構内）



1~4 SX2593、5 SX2594、6~8 SX2595、9 SX2596、10~12 SX2598

第116次調査地出土遺物（遺構内）

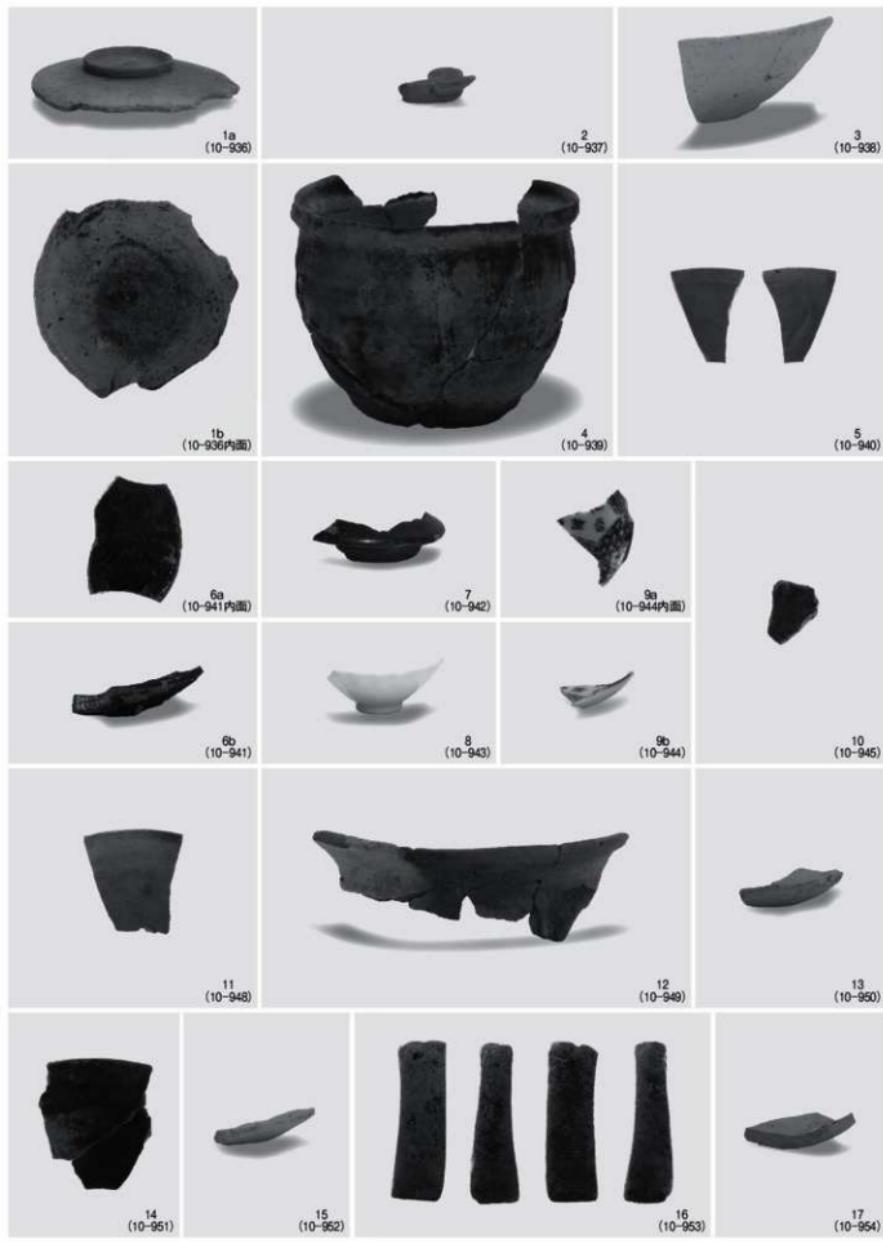
図版11



1 SX2598、2 第Ⅰ層、3-16 第Ⅰ層カクラン（1はS=1/4）

図版12

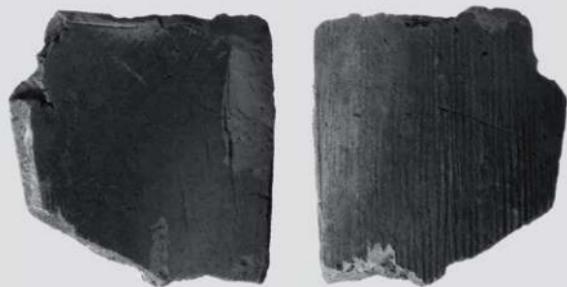
第116次調査地出土遺物（SX2598・第Ⅰ層・第Ⅰ層カクラン）



1—10 第II層、11—16 第III—1層、17 第IV—1層

第116次調査地出土遺物（第II層・第III—1層・第IV—1層）

図版13



1
(10-934)



2
(10-935)



3
(10-946)



4
(10-947)



5
(10-955)



6
(10-956)

1・2 第Ⅰ層、3・4 第Ⅱ層、5・6 第Ⅳ層 (全てS=1/4)

図版14

第116次調査地出土遺物（第Ⅰ層・第Ⅱ層）



1~4 第IV-1 層、5~10 鐵滓 (1~4 付S=1/4)

第 116 次調査地出土遺物（遺構内）

図版15

報告書抄録

ふりがな	あきたじょうあと							
書名	秋田城跡							
副書名	秋田城跡歴史資料館年報2021							
卷次	2021							
シリーズ名	秋田城跡歴史資料館年報							
シリーズ番号								
編著者名	伊藤武士、佐藤桃子							
編集機関	秋田市立秋田城跡歴史資料館							
所在地	〒011-0907 秋田県秋田市寺内焼山9番6号 TEL: 018-845-1837 FAX: 018-845-1318							
発行年月日	2022年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド 市町村	北 緯 遺跡番号	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調 原	査 因
あきたじょうあと 秋田城跡	あきたし てらうら 秋田市寺内	05201	186	39度 44分 20秒	140度 05分 00秒	第116次 20210501 ～ 20210914	385	保護管理
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
秋田城跡 第116次調査	城柵官衙 遺跡	奈良～ 平安	材木堀跡2条、築地堀跡1 条、掘立柱建物跡1棟、堅 穴建物跡5軒、土坑2基、 焼土遺構7基、柱堀り方状 遺構1基	須恵器、土師器、 赤褐色土器、陶磁 器、瓦、土製品、 石製品、鉄製品、 鉄滓				外郭区画施設の調 査
要約	調査の結果、調査地西側においては外郭区画施設を構成する遺構が検出され、外郭南西 隅部における外郭区画施設の方向や位置関係および変遷を把握することができた。また城 内側となる調査地東側においては鉄製品の生産に関わる鍛冶工房と考えられる堅穴建物跡 や焼土面などの遺構が検出され、鉄生産の加工・生産が行われていた利用状況を把握する ことができた。							

秋田城跡歴史資料館要項

I 組織規定

秋田市立秋田城跡歴史資料館条例 拠粹（平成 27 年 12 月 21 日 条例第 62 号）

第 1 条

史跡秋田城の保護および管理、調査研究、整備、公開ならびに活用を通じ、市民の教育と文化の向上に資するため、秋田市立秋田城跡歴史資料館（以下「歴史資料館」という。）を秋田市寺内焼山 9 番 6 号に設置する。

第 2 条

歴史資料館において行う事業は、次に掲げるものとする。

- (1) 史跡秋田城の保護および管理に関すること。
- (2) 史跡秋田城および関連遺跡の調査研究に関すること。
- (3) 史跡秋田城の整備および公開に関すること。
- (4) 史跡秋田城および関連遺跡の出土品および調査成果の展示および普及に関すること。
- (5) 史跡秋田城についての学習活動の支援等に関すること。
- (6) 関係機関および関係団体等との連携に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、歴史資料館の設置の目的を達成するために必要と認める事業

II 発掘調査体制

1 調査体制

秋田市

秋田市長	穂 積 志
観光文化スポーツ部長	納 谷 信 広

調査機関

秋田市立秋田城跡歴史資料館

館長	佐 藤 鋼 一
----	---------

事務長	伊 藤 武 士
-----	---------

調査・普及担当	管理運営担当
---------	--------

主席主査	菅 沼 隆	主査	中 島 芳 美
主席主査	畠 山 隆	主査	能 登 園 美
主事	佐 藤 桃 子	主査	三 浦 龍
会計年度	阿 部 美 穂	主査	工 藤 伸 吾
会計年度	今 野 祥 子		

2 調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

秋田城跡（秋田城跡歴史資料館年報 2021）

印刷・発行 令和4年3月
発 行 秋田市教育委員会
編 集 秋田市立秋田城跡歴史資料館
〒011-0907 秋田市寺内焼山9番6号
TEL 018-845-1837 FAX 018-845-1318
印 刷 秋田協同印刷株式会社

三

